



脱プアウーマン！貧困女子
が夢を叶えるナポリタンの
法則



m. rurigaki

色とりどりにきらめくLEDのイルミネーション。イブの午後八時、渋谷の街はクリスマスモード一色だ。この日ばかりは行き交う車のテールランプも、キリスト誕生の前夜祭を祝うため輝いているようだった。

喧騒に包まれた渋谷駅前のスクランブル交差点、信号待ちの歩道にはイブの夜に繰り出した大勢の人々がうごめいている。その雑踏の中には赤い衣装をまとった何人ものサンタクロースたちがいて、それぞれに洋菓子店やパチンコ店、キャバクラの名前が描かれた看板を持っていた。

宇田川町にあるテキサス・スタイルのステーキ・ハウスの看板を手をしているのがルリガキ・ミワだ。

衣装はお決まりのミニスカ・サンタ。コートやロングブーツ、手袋で防寒対策はしているものの、膝上二十センチのミニスカート、それも生足では寒波が下半身を直撃する。

腰にはさっきマツキヨで買った、揉むだけのカイロをつけている。それでも三十路まであと三年というアラサーの身にこの寒さはキツイ。ブーツとスカートの間の太ももからお尻にかけて、明日の朝にはきっと寒冷じんましんが出ているに違いない。

「あの、エロ店長めえ」

寒さに歯を食いしばりながら、ミワは数時間前のできごとを思い出していた。

様々なアルバイトを掛け持ちしているミワは、キャンペーンガールの派遣会社にも登録している。

この日のクライアント、黒いスーツを着て銀縁メガネをかけたステーキ・ハウス店長のリクエストがこのミニスカ・サンタだった。

派遣会社が用意していた衣装には防寒用の厚手の赤いタイツもあった。しかし、やせて神経質そうなステーキ店の店長の「強い要望」で生足のまま街頭に立つはめになったのだ。

「生足でなければミニスカ・サンタたりえない。ロングブーツとミニスカの間の`絶対領域、こそがミニスカ・サンタのレゾン・デートルなのだ」

銀縁メガネを人差し指で上げながら、そんな言葉で店長は、ミワがタイツを着用することを批判した。

なにを難しい言葉で自らのフェチ哲学をとうとうと披瀝しているのか。あきれたがクライアント様のご機嫌を損ねるわけにはいかなかった。

そもそも、きょうのバイトはよく確認しないで、普通のサンタ・コスチュームだと勘違いして了承したものだ。早呑込みのおっちょこちょい、母親からいつも注意されていたことだ。

「それにしても……」

二時間前のことを思いだしていた。着替えのため連れて行かれたステーキ・ハウスの事務所、その片隅に置かれたダンボールの中に、ビデオカメラのレンズが光っていることをミワは見逃さなかった。

このナイスボディを永久保存版として記録されるのは、きょうの日給七千円とは、また別料金だ。赤いサンタのコートで着替え風景がカメラに映らないようガードしたが直接、抗議することはできなかった。

やるせなさに吐いたため息はタバコの煙みたいに白かった。ハケンはこうした仕打ちに一体どこ

までじっと耐えなければならないのだろうか。

寒さに震えながら、そんなことを考えていたとき、スクランブル交差点を男といっしょに渡ってきた女と目が合った。女は目を丸くしてミワを見ている。

「ミーワー、やーだー！」

コウモリも驚いて飛び立つような周波数の高い声に、気温零度にもかかわらず背中に冷たい汗が流れた。いま最も会いたくない女に見つかってしまったようだ。

「なあに、やってんのよう、もう」

茶色いフェイクファーのロングコートに全身を包み、パプアニューギニアの極楽鳥が頭に舞い降りたようなヘッドドレスをつけたフジタ・ノリコが目の前にいた。

ノリコはムーミンに出てくる小さな女の子、リトルミィのように、髪の毛を頭のとっぺんでたまねぎ型にキリリと結び上げ、隣のいかにもホストっぽいタッキーになりそこねた妖怪人間のような崩れジャニーズに身体を預けながら冷ややかな笑みを浮かべている。

「ミワも全然、進歩していないよねえ。イブの夜にこんなバイトなんて。まあ、がんばって、そのうちにいいこともあるから」

一流会社の正社員がハケンに語りかける時のような、さげすんだ口調だった。

ノリコが踵を返そうとした時、ベムがノリコの腕を掴んだ。

「何、ノリちゃん、いいじゃん、カノジョ、キレイじゃん」

妖怪人間が下手なラップのリズムを刻むようにミワの方に視線を向けながらノリコにいった。

「ミワさんっていうの。今度、うちの店、来てよ」

あわてながらポケットに手を入れて名刺を探すベムをノリコは制した。

「ダメよ、アヤト。ミワは貧困女子— `プア・ウーマン、なんだから。クラブ・ゼウスのように座っただけで何万もする店にいけるわけないの。さ、いこいこ」

そうやってノリコは、アヤトという人間の名を騙る妖怪人間の左腕にぎゅっとしがみつぎ、見せつけるようにベムの顔を楽しげに見上げながら渋谷センター街の人ごみの中に消えていった。

ミワと同じ年、二十七歳のノリコ、かつてマンションの一室を二人でルームシェアしていた同居人だった。

当時のノリコもミワと同じくアルバイトで、日々の糊口をしのぐ生活を送っていた `プア・ウーマン、だった。ノリコのため、苦しい生活の中からお金や食料を都合してやったことも一度や二度ではなかった。

そんなノリコの暮らしに変化が起きたのは今から半年ほど前、道玄坂の「激安」をうたうキャバクラに勤めるようになってからだ。

そこでノリコはお客さんのひとりから「ねえ、今の生活から抜け出したいくはない？」という言葉で、あるビジネスを持ちかけられたのだ。

「チベット産でポリフェノールが赤ワインの五万倍という魔法の植物」とやらを使ったジュースを、自らも愛飲しながら友人や知り合いに広めていくというものだった。

ノリコはすぐにそれに飛びついた。そして「今の生活から抜け出したいくない？」といいながら、ミワにも熱心に勧めてきたのだ。

最初に二十万円のスターターキットを購入して、ディストリビューターとやらになる。そのあと最低でも四人を誘えば、次々に子会員、孫会員が増えていき、一年後には悠々自適な暮らしが待っているという。

「マルチじゃん！」

あきれミワにノリコはいった。

「ミワはこんな生活、いつまで続けるの？ かわらなきゃ！」

涙ながらに訴えるノリコ。正直、ミワは引いていた。

それからノリコはキャバクラにやって来るカモに、まるで呪文のように「今の生活から抜け出したいくない？」という言葉投げかけながら勧誘を続けた。

働く人の三人にひとりがハケンという今のご時世、激安キャバクラにやってくる客の中にも、その言葉に興味を示す男たちは少なくなかったらしい。

そうしてノリコは、何羽かのカモを子ネズミに仕立てることに成功すると、南青山にマンションを借りて、シェア・ハウスから出て行った。

うらやましくないといえば嘘になる。なんたって今の自分は、クリスマス・イブだということに、凍えるような寒さの中、ミニスカ・サンタの衣装をまとい、薄給でセクハラにも耐えなければならない立場なのだ。

マッチ売りの少女もこんな気持ちだったのだろうか。しかもきょうのクリスマス・イブはミワの二十七回目の誕生日でもあった。

それにしても寒い、特にお尻のあたりが凍えるようだ。そう思ったときに、後ろで、酔っばらいのおっさんが叫んだ。

「見ろよ、サンタのねえちゃん、半ケツだぞ！」

周囲に巻き起こる歓声と酔っばらいたちの笑い声。

あろうことか、おっさんはミワのスカートを指でつまんでめくっている。

ミワはきょう、長年、はき続けたせいでゴムがとことん緩みきった薄いブルーのパンツを履いてきたことを思い出した。どうやら下がり下がっていたらしい。

「それにしても、きったねえ、パンツだな」

酔っばらいたちが弾けるように一斉に嘲笑を上げる。

ミワはサンタの衣装みたいに顔を真っ赤にしながら、おっさんのバーコード頭を手にしたステーキ・ハウスの看板で張り倒した。

最悪のバイトが終わった時間は、午後十時を過ぎていた。

ユニクロの赤いダウンを着たミワは白い息を吐きながら風が吹き抜ける師走の高円寺を歩いて自宅マンションへ向かっていた。

イブの夜だけあって、この時間、いつもなら人通りの少ない高円寺の南口商店街にも若いカップルの姿が目立つ。

そういえばクリスマス・イブを最後に彼氏と過ごしたのは何年前だったろう。ここ数年、ミワはまったく恋愛と無縁だった。

いいよってくる男もいなかったわけではない。半年ほど前にも派遣先のイベントを仕切っていた、広告代理店の男に打ち上げの席で口説かれた。亡くなった父に面影が似た、理知的で優しく、そんなその男にミワは好意を持った。

出会った時に渡された名刺は、彼が正社員であることを物語っていた。広告代理店の正社員ならば、結婚しても苦労はしないだろう、そんな打算も頭に浮かんだ。

誘われるままに連れて行かれた六本木のバー。そこではけっこう、いい感じにもなった。このまま一夜を共にすることになるのかも……。そう考えていた時、ある事実を思い出して冷たい水でも浴びたかのように一気に酔いがさめた。

そのときはいていたのも、きょうと同じゴムが伸びきったパンツだったのだ。あわててミワは「いけない、用事を思い出した」といって、男を店に残し急いで帰った。`プア・ウーマン、貧困女子は恋のチャンスさえも痛すぎる理由で逃してしまうのだ。

以来、王子様は白馬から落ちて骨折でもしているのか迎えに来る気配すらない。まさか王子様もトランクスが伸びきっているわけではないはずだ。

高円寺の商店街を歩くミワの手には渋谷で買った五百円のクリスマスケーキがぶら下がっている。

イブの夜も更けて、店先で投売りしていたものを、マンションでひとりさみしくイブの夜を過ごしているであろう、ハルヨシのために買ったのだ。

ハルヨシはノリコが出て行ったあとで入居してきたシェア・ハウスの同居人。ミワよりも二つ年下、二十五歳フリーターという貧困男子だ。

男と同居している、他人にそういえば恋愛感情でもあるかのように思われるがそうではない。単にシェア・ハウスの大家のタナカがハルヨシの名前「春美」を「ハルミ」と思い込み、女性と勘違いして入居させたに過ぎない。

シェア・ハウスといえば、夢を持つ若者たちが都心で楽しく、オシャレな共同生活を送っている。そんなテレビドラマのようなイメージを持つ人も少なくない。

だが、その実態は単にひとりで家賃を払えない若者たちと、そんな若者たちを利用して小銭を儲けようという輩の利害関係の一致でしかない。

例えばひとりに貸せば家賃が月に八万円にすぎないマンションの一室も、三人にひとり四万円で貸せば、合わせて十二万円になる。

そこに暮らす若者たちも四万円では風呂付きのアパートにも住むことができないが、浴室もトイレも共同で使うということ除けば、キレイなマンションに暮らすことができるのだ。

いわばミワのような貧しい若年層をターゲットにした貧困ビジネス、それもかなりいい加減なものなのだ。

ミワがシェア・ハウスの存在を知ったのは、ネットで偶然、「ルームシェア仲間募集掲示板」という板を見つけたのがきっかけだった。ハルヨシも同じようにネットで応募してきたのだが、大家のタナカがしっかりと身元を確かめもせず入居させたのだ。早呑込みのおっちょこちょい、ミワの性格と似ているというより、タナカが単にいい加減なだけだった。

入居の日、ボストンバックひとつを持って玄関に現れたハルヨシは女の子のように線が細かったが、紛れもないオトコだった。すぐに大家のタナカに電話で猛抗議をした。タナカもそこで初めて勘違いに気づいてハルヨシの入居は取り消すといった。

しかし「ネット・カフェに泊まるお金もない、どこにも行くところがないので一晩だけ泊めてほしい」というハルヨシが切々と語る話を聞いて、ミワは同居を許してあげようという気持ちに傾いた。

聞けば、福島郡山から上京、女性をきれいにするのが好きなので美容師になったという。そして憧れの地、表参道の美容院で働くことになったものの、半年で辞めてしまった。

なにせ労働時間は最低でも午前九時から午後十時、昼休みは二十分で、忙しい日はその二十分すら取れない。給与は完全歩合制で残業手当もなく、週一日の休みさえ出勤しなければ給与に響く。もちろん休日手当などもない。そんな過酷な仕事に耐えかねたというのだ。

今は日雇い派遣のバイトで食いつないでいる、そう語るハルヨシにミワは同情というかシンパシーを感じた。彼もまた、今の時代に虐げられながら生きている貧困男子だと思ったからだ。

一緒に住んでもだいじょうぶだろう、そう思ったのはシンパシーからだけではない。

ハルヨシが女性に興味のない男、いわゆるオネエ系であることをカミングアウトしのだ。女装こそしていないが、その優しい口調や仕草は、たしかにミワと同じ女特有のものだった。もしかしたら男まさりなミワよりも女性らしいかもしれなかった。

同居といっても、部屋はそれぞれ別々だし、一日の大半はバイトに出かけているため、頻繁に顔を合わせるわけでもない。そう考えてミワはタナカにハルヨシと同居しても良いと告げた。タナカはめんどろな再募集をしなくてすむことがいかにもうれしいような口調で「なにか問題があったらいつでもいつでもいってください」といった。

実はミワがハルヨシとの同居を許したのには、もうひとつ理由があった。オネエ系の男と暮らす。この体験がいつか自らの夢のために役立つのではないか、そう考えたのだ。もっともミワは日々の暮らしに追われ、その夢を昔ほど真剣に追いかけているわけではなかったのだが……。

ハルヨシとの半年間の暮らしにまったくトラブルがなかったわけではない。最大の事件は「ヤフオク事件」だった。

ベランダに干していたピンクのチェック柄のパンツがなくなったのだ。穴が空こうがゴムが伸びようが構わず、少ないパンツをローテンションしながら履いているミワは一枚でもなくなればすぐに気づく。

犯人はハルヨシ以外にはありえない。そう考えてハルヨシを問い詰めたところ、うろたえながらも罪を認めた。

「ちょっとアンタ、女に興味がないんじゃないか？」

怒気をふくむ口調で責めるミワに、ハルヨシは泣きながら「ネットオークションに出品した」と告白した。

年季が入ったピンクのチェックの柄パンツは、なぜか一万円近い高値で売れたという。新品に近いより、そうした「ビンテージもの」のほうが高値で売れるというのだ。オトコどものアタマの中は一体、どうなっているのか。

ハルヨシは入金の日、吉野家で牛丼の大盛りに味噌汁はもちろん生卵にお新香、サラダまで付けるというフルコースを堪能したうえ、当時つきあっていた「彼氏」と居酒屋の笑々に繰り出す「豪遊」をしたという。

どんな落札者にどんな風に使われるのか、考えれば気持ち悪くなったが、履き古した汚いパンツが一万円で売れるなら、自分で出品することを考えたのも事実だった。だって一万円あれば、あたらしいパンツが何枚も買えるのだからー。

高円寺の駅から歩いて十五分の場所にある築二十年のマンションにたどり着いたのは、午後十一時をすこしばかり過ぎたころだった。二階の角部屋を見上げると、電気はついていなかった。ハルヨシはイブの夜を新しい彼氏とでも楽しんでいるのだろうか。

階段を上り、鍵を開けて、真っ暗な玄関に入った途端、違和感を覚えた。空気の流れが、いつもと違うような気がしたのだ。

電気のスイッチを入れると同時に、手に持ったクリスマスケーキのビニール袋を思わず床に落とした。

リビングにあるはずの冷蔵庫やテーブルが消えて、もぬけの殻になっていたからだ。

急いでブーツを脱ぎ捨てて部屋に上がる。2LDKの東側にある自分の部屋のドアを開けてミワはぼう然とした。自分で買ったテレビもベッドもドレッサーもファンシーケースもない。入居前のようなただの空き部屋状態となっていたのだ。

「……なによ、これ」

あ然としてつぶやいたミワは、足元に一枚の紙が落ちているのに気がついた。

そこにはハルヨシらしい、女子高生のような可愛らしい丸文字と顔文字で「ミワさん、ごめんねm(._.)m」と書かれていた。

「ミワ、いい加減、起きたらどうなの」

一階で叫ぶ母親の声でミワは目を覚ました。

身体を覆っているのは、昨日までかけていた貧相な掛布団とは明らかに違う上質な羽毛布団だ。その軽い質感と懐かしい匂い、かすかに聞こえる波の音と海鳥の鳴き声で実家に帰ったことを実感した。

そこは高校三年生まで過ごした部屋。当時好きだったロック・グループのポスターもそのまままだ。

ベッドから下りて、窓辺まで行ってカーテンを開ける。ガラスの向こうには陽光にきらめく太平洋が見渡せた。

海を見下ろしながら大きく背伸びをしたあと、ミワはおとといの悲惨な夜のことを思い返していた。

帰って見たらマンションはもぬけの殻、備えつけのエアコンすら消えていた。ミワからの電話であわてて駆けつけた大家のタナカは頭を抱えながら「やられた」とつぶやいた。

タナカが経営するほかのシェア・ハウスでも以前、入居者が家財道具をすべて持ち逃げしたケースがあったらしい。出張買取りのリサイクル業者に頼めば、わずか二時間ほどで家財道具をすべて運び出して現金化できるというのだ。

シェア・ハウスは基本、敷金ゼロ礼金ゼロ保証人不要で、普通のアパートやマンションの賃貸のように連帯保証人や保証会社などが存在しない。

そのため、そうした事件が起きることも珍しくはないという。

入居の際にはせいぜい親族の連絡先を聞く程度のハードルしかない。当然、大家のタナカはハルヨシの実家に連絡したが、もう何年も連絡すらないという。

おかげで朝まで二十四時間営業のマクドナルドで過ごすはめになった。サイフの中にはバイトの当日払いでもらった七千円と八百二十円しかなかった。仕方なく百円のコーヒーで朝まで過ごしたのだ。

店内には三十代のホームレスのような男性、大きなボストンバッグを持った高校生くらいの男たちがいた。

いわゆる「マック難民」たちだ。少し前までネット・カフェで寝泊まりしていた人々も今は百円で冬の夜をしのげるこういう場所に集まっているという。

さすがにミワのような二十代の女性の姿はなかった。それはそうだろう、なんたって女子にとって一年でもっとも大事な日といえるクリスマス・イブなのだ。そんな夜に「マック難民」として朝まで過ごす女性は自分のほかに、どこかにいるだろうか。

そうして朝を待ち、始発で高円寺からおよそ二時間をかけて、ミワは横浜市郊外にある実家まで戻ってきた。

身につけていた衣服やサイフ、持っていたバッグの中身のほかは、衣類もすべてなくなった。使い古したパンツやブラジャーは今ころ、ネットオークションにでも出品されているのだろうか。

一階のダイニングには湯気を立てる白いご飯と味噌汁、そして焼き鮭と卵焼きの朝食が用意さ

れていた。こんなまともな朝食は、ほんとうにひさしぶりだ。なにせ昨日までは前夜に買ったコンビニのおにぎり一個が一日の最初の食事だったのだから。

「いただきます」

この言葉を口にするのもひさしぶりかも知れない。ミワはゆっくりとナスの味噌汁を口にふくむ。体中が暖かさに満たされる、心から安らぐ味だった。

母親は黙ったまま背中を向けて洗い物をしている。

きのう、着の身着のまま帰ってきたミワに、母親はあきれた顔をしたあとため息混じりにこういった。

「できちゃった結婚でもなんでもいいから、誰かもらってくれないかねえ」。

皿洗いを続ける母の、無言の背中にプレッシャーを感じて、ミワはテーブルの片隅にあったテレビのリモコンを手にとってスイッチをオンにした。

テレビ画面には全国各地のクリスマスのイベントを紹介するVTRが流れていた。そのあとで映し出されたレモン色のスーツ姿の女性キャスターは笑顔で、そのVTRについてコメントしたあと、眉間にしわを寄せて次の話題に移った。

「きのう、国立社会保障・人口問題研究所から衝撃的なデータが発表されました。VTRにまとめましたので、ごらんください」

画面は再びVTRに切り替わる。そこにはモザイクでぼかしたネット・カフェの若い女性たちの映像に白いテロップで「ひとり暮らしの女性の三人にひとりが『貧困状態、』という文字が映し出されていた。

今や二十～六十四歳のひとり暮らしの女性の三人にひとりが『貧困状態、だといわれているらしい。

なんでも所得から家賃を引いた生活費が、生活保護の基準となる、およそ八万五千元以下ならば『貧困、とカテゴライズされるという。

ならば都会にひとりで暮らしている若い女は、二人にひとり以上が自分のような貧困女子、プア・ウーマンにならざるをえないだろう。

今どき女性で正社員になれるのは四割ほどだ。残りの六割は大半が派遣社員や契約社員、あるいはフリーターといった、「非正規雇用」だ。

正社員に比べて当然、収入も低い。それでいて女であるがゆえに身だしなみにも気を遣わざるをえないので、男に比べて洋服やコスメに対する支出の割合も高くなる。「非正規」で家賃の高い都会に暮らしていれば「貧困女子」になってしまうのは、いわば必然なのだ。

ミワも例外ではなかった。映画やドラマの制作をやりたくて大学三年生の時からテレビ局や映画会社に就活を行ったが、ことごとく不採用だった。

ひとつだけ大手映画会社の最終面接にまで残ったが、就活の疲労からか地下鉄の駅のホームに貧血で倒れ、面接会場に行けなかった。

仕方なく業種を問わず就活を繰り返したものの、どれもこれも内定にはいたらなかった。この最初のステップでつまずくと、あとは「非正規さん」としての人生を歩まざるをえない。ミワが選んだのはテレビ局の孫請けで、ドラマを制作する会社の契約社員だった。

月給は手取りで十一万五千元、とても東京という世界的に家賃の高い都市で暮らせる額ではない。

家賃五万円のシェア・ハウスに暮らしても、給料から家賃を引けばサイフに残るのは毎月六万円ちょっと。この中から光熱費と携帯電話の通信費が飛び、残りのほとんどが食費に消えていく。まさに生活保護基準以下の生活をしいられていたのだ。

働きはじめた当初は夢だったドラマ作りに関われたこともあり、無我夢中で働くことができた。しかし二十五歳を超えたころから未来が見えなくなった。

給料はまったく上がらない。以前なら契約社員を経て正社員に登用されることも多かったというが、インターネットに押されて広告収入が減り続けるテレビ業界では契約社員の数は増える一方、契約社員から正社員になれるケースはほとんどなくなっていた。

残業代がまともに付けば、マンションが買えるほど働かされた。それでも続けてこられたのは制作進行という、弁当の発注やロケ車の手配といった雑用係ではあるが、ドラマ作りに関われたからだ。

しかし、そんな仕事もなくなってしまった。制作費のかかるドラマの仕事は減る一方、そんな中でドラマの現場から外されてしまったのだ。

新たな派遣先は朝のワイドショーだった。与えられた仕事は主婦たちが興味を示す、芸能スキャンダルや愛憎のもつれの末に起きた殺人事件などを追いかけるスタッフたちをフォローするデスク業務だった。

月曜から金曜まで、毎朝オンエアするためスタッフは常に扱うネタに汲々としていた。プロデューサーの口癖は「あ～あ、誰か死なねえかな」というもの。有名人が誰か亡くなれば追悼企画で、そこそこ視聴率が取れるからだった。

あまりのくだらなさに仕事への情熱も失い、半年前、制作会社との契約を打ち切った。

それからはキャンペーンガールの派遣をはじめ、パチンコ店やキャバクラの新装開店を告げるティッシュ配り、アイドルのコンサートの警備、真冬の路上でカウンターを手に交通量を調査するバイトなど、様々なアルバイトをしながら暮らしてきた。

だがハルヨシにトドメをさされ、そんな暮らしにもピリオドが打たれた。もはやミワに残されたのはパラサイト・シングル—実家で親と同居する道だけだった。ここにいれば少なくとも家賃の心配からは解放される。

これから一体、どうやって生きていけばいいのだろう。あたらしい年も近いというのに、今の自分には何の夢も希望もない。 考えるとおなかのあたりに重いかたまりができたような気がして食欲も失せた。母が用意してくれた食事はまだ半分以上残っていたが、ミワは「お昼にまた食べる」といって箸をおいた。

横浜市郊外の実家に帰って二日目の夜、ミワはとても幸せな夢を見た。南の島のビーチで父と一緒に波と戯れる夢だ。振り向くと今よりも若い母がいかに幸せそうに微笑みながら父と自分を見守っている。

その時、突然、大きな波がミワのもとに迫ってきた。その波がミワの体を飲み込んだ時だ。

夢の場面が南の島のビーチから、真っ暗な空間に切り替わった。

突然、宇宙空間にでも放り出されたかのような感覚だった。

辺りを見回す。すると背後の闇にひとりの男が浮かび上がってきた。

黒髪でレトロなスーツ姿の外国人男性。年はミワよりすこし上、三十代半ばくらいだろうか。モノクロ映画時代のハリウッドスターのようにも見える。

その男はミワに気づいて驚いたように目を大きくすると開口一番、流ちょうな日本語でこういった。

「きみは、誰なんだい？」

「あなたこそ、誰なのよ」

楽しい夢のさなかに現れた男に、ミワはなかばむっとしながらいいかえした。すると男はネクタイを正しながらレディに敬意を表すような笑顔でこういった。

「ぼくはナポリタン・ヒル。バージニアの生まれだよ」

「ナポリタン？」

笑いながら聞き返した。そういえばウインナーやピーマンが入ったケチャップ味のスパゲティは子供のころの好物だった。いつも口のまわりを真っ赤に染めて食べたあと、母が優しくふいてくれたのを覚えている。スパゲティがパスタと呼ばれるようになってから、いつしか目にすることもなくなったけれど。

「ちょっと前まで新聞記者をしていたんだけど、ある人物と出会ったことがきっかけで、夢を叶えるために新聞社を辞めて、ある研究をしているんだ。ここもぼくの研究室のひとつだよ」

「ここって？」

「ぼくの`交信室、だよ。それにしても知らない人、それも東洋の女性が現れるなんて、初めてのことだ。ニュートンやリンカーンなら、ここに何度か来てくれたんだけどね。ワクワクしてきたよ。で、きみは誰なんだい？」

(夢にありがちな、よくわからない会話だ)

そう自覚しながらも、目を輝かせながら見つめているナポリタンというへんてこな名前の男に、ミワは自己紹介をした。

「私はルリガキ・ミワ...」

名前をいって、それ以上、他人に語るべきことがないことに気がついた。自分には今、何の職業も、彼のように語るべき夢もないからだ。

ミワが黙るとナポリタンは何かを察したかのように優しい笑顔をたたえながら口を開いた。

「なるほどなるほど。もしかしたら、きみはぼくの研究を進めてくれるために、この`交信室、に現れてくれたお客さんなのかもしれない。よかったら、ぼくの研究に協力してくれないかい？」

」

「どんな研究なのよ」

ナポリタンは黒い目を輝かせながら身を乗り出してきた。

「五年前にぼくはピッツバーグで約束したんだ、あの偉大なるスコットランド人と。誰もが夢を叶えるための成功哲学を確立するってね！ ルールを守れば誰もが大金を手にてきて、誰もが望み通りの人生を送れる、そんな魔法のノウハウを体系的にまとめる研究だ。

エジソン！ フォード！ シュワップ！ 彼らが成功するプロセスを僕は目の当たりにしてきた。彼らの分析はほぼできた。今、必要なのは、それをゼロから実証することなんだ」

「エジソン？ フォード？」

「まさか知らないわけじゃないだろ。発明王のエジソン、自動車王のフォード、今をときめく、成功者たちの名を！」

ミワはわけがわからなくなっていた。

発明王エジソンや自動車王フォードの名前くらいは知っている。だけどそれは百年ほど昔の、偉人たちの名前だ。

しかしたしかに今、この男は「今をときめく」といった。ミワは頭に浮かんだ率直な疑問をナポリタンにぶつけてみた。

「あなたね、一体、今をいつだと思っているわけ？」

「一九一三年だ」

ナポリタンはきっぱりといった。

「あのねえ、今は平成二十五年、二〇一三年でしょ」

ナポリタンは、数秒間の沈黙のあと、目を見張りながら口を開いた。

「パーダウン？」

なんで突然、英語になるのか、わけがわからない。

「だから、トゥエンティ・サーティーンよ」

「トゥエンティ・サーティーン、二〇一三年一ということは二十一世紀か！ なるほどなるほど、すばらしい！ なんとということだ！

交信室は過去の偉人と交信できるじゃない、未来とも交信できるというわけか！ これは驚いた、いやはやなんとということなんだ」

ナポリタンはこぶしを握りしめながら、ひとりで興奮している。ミワはますますわけがわからなくなっていた。

ミワの冷めた視線に気づいたのか、ナポリタンはひとつ、咳をすると、すべてを理解したようにこういった。

「失礼、ミワ。ぼくがいるのは一九一三年のワシントン。まさか百年後のレディとお会いできるとは思わなかったので少々、興奮してしまったようだ。」

「ふーん、ワシントン在住にしては、ずいぶん日本語がお上手ね」

「日本語？ あいにくぼくは日本語は話せないのだが……」

そこまでいってナポリタンは、はっと気づいたように開いた左の掌に右のこぶしを打ち付けながら笑い出した。

「そうだ！ そうだよ！ だってぼくはフランス語しか話せない、あのボナパルトとも、普通に英語で話していたじゃないか。なるほどなるほど、ここでは時空も言語も関係ないというわけだ」

ナポリタンは両手を天に向かって掲げてから、なにかを確信したようにミワの手を握りしめた。

整えられた髪がすこし乱れたナポリタンは、キスを迫るようにミワに顔を近づけながら、こういった。

「きみに、夢はあるかい？」

戸惑った。二十代前半のころにはたしかに夢はあった。しかし、それは今の時代、今の自分には到底、叶いそうもない夢だった。

「そんなもの……、とっくに捨てたわ」

「ほう、なぜだい？」

「夢を追うなんて余裕はないの。今の私はちゃんとした仕事も、ひとりで住む家もなくて明日からどうやって生きていけばいいのか、それすらもわからない。そんな状況でどうやって夢なんて語れるのよ」

思わず声をあららげたミワの目をナポリタンはじっと見ている。そして眉根を寄せて静かな声でこういった。

「なるほどなるほど、きっとミワは今、いろんなことを考えすぎているんだ。心配なことで、頭の中がいっぱいなんだろう？」

たしかにその通りだった。都内でのバイトにはもう通えない。次の生活の糧をどうやって探せばいいのか。そもそもどんな仕事を探すべきなのか。

それだけではない、今月の携帯電話代、キャッシングを繰り返してきたクレジットカードの支払い、滞納している区民税、何よりも将来のことを考えるといろんな不安が押し寄せてきて胸が押し潰されるようだった。

その心中を察したかのようにナポリタンは言葉を続けた。

「ミワは一度に一体、いくつのことを考えられるんだい？」

「一度には、ひとつよ」

「そうだ、人間は一度に、ひとつ以上のことは考えられない。しかし考えていることが消極的なために、たくさんのことを考えているように思えてしまうんだ。だがそれは危険だ、とてもあやうい」

「穏やかじゃないわね、危険ってどういうことよ」

「恐ろしいのは、そうした消極的な考えに支配された心は、今を、そして未来をも決めてしまうことだ。

ヒンズー教の古い経典の中にこんな言葉がある。いいかい。—『人間は、自分の考えているような人間になる』。

つまりだ、ミワは、きみ自身が考えているような人生を送ることになるんだよ」

パラサイト・シングル生活三日目の朝も母親の作った朝食を食べた。

トーストにベーコンエッグ、そして山盛りのフルーツサラダ。野菜や果物のビタミンが身体だけでなく、心までリフレッシュさせてくれるようだった。

「ごちそうさま」とミワはいったが、母親にリアクションはなかった。

実家に帰ったときから気になっていたのだが、昔に比べて今の母は随分、無口だ。昨夜にはダイニングテーブルで頭を抱える姿を目撃している。なにか悩み事でも抱えているのかもしれない。

気になったが、切り出すことはできなかった。「なんでも相談に乗るよ」などと、今の自分がいいだすのは、エディ・マーフィーが沈黙の効用について語るくらいタチの悪い冗談に思えたからだ。

食器の洗い物をすませたあとで、階段を上って二階にある自分の部屋に戻った。調べものをするためだ。

早速、トートバッグからB5サイズのノートパソコンを取り出す。スマホなんて高い携帯端末など買えるわけもなく、バイト情報を集めるため、ミワはずっと、これを持ち歩いている。ハルヨシに家財のすべてを奪われたが、ノートパソコンについては、いつも持ち歩いていたことが幸いした。

ノートパソコンを開いて起動した。

昨日の夢に現れたナポリタン・ヒルという男、奇妙な名前だが、どこかで聞いたことがあるような気がして調べてみることにしたのだ。

普段は夢を見ても、どんな内容だったのか思い出せないことも多い。しかしきのうの夢は、ただの夢とは思えないほどのリアリティがあった。ナポリタンと名乗る男の一言一句が実際に会話をしたかのように脳裏に焼きついてた。

もしかしたら実在の人物なのかもしれない、そう考えてグーグルの検索画面にアクセスして、「ナポリタン・ヒル」というワードを入力して検索してみた。

しかし、出てくるのは「スパゲティ・ナポリタン」に関するサイトだけだった。サイトのひとつによればなんでも最近、ナポリタンは昭和の味として見直され、ちょっとしたブームとなっているらしい。

ナポリタンが子供の頃の大好物だったミワにとっては、`ナポリタン、という言葉の響き自体が懐かしかった。それは家族三人がそろっていたころの、幸せな食卓の象徴のように思えたのだ。

結局、ナポリタン・ヒルというワードは一件もヒットしなかった。なぜ見知らぬアメリカ人男性が現れたのか、ふしぎな気もしたが、夢なんてそんなものかと思ってパソコンを閉じた。

ベッドに横たわった。夢の中でナポリタンがいった、言葉を思い出していた。

`人間は、自分の考えているような人間になる、。

たしかに今の自分は、自分の考えが作り出したものかも知れなかった。

「できれば映画の仕事に就きたいが、こんな就職氷河期の時代、どうせちゃんとした会社になんか就職できっこない」「いざとなったらフリーターにでもなればい」「どうにもならなくなったら実家に帰ればい」

心のどこかでそんな風に考えていたのかもしれない。今の自分は、まさに自分が考えていたネガティブなシナリオ通りになっているのではないか。

実家に帰ったところでどうにもなるわけではないこともわかっている。ひとり暮らしの母親を頼りにするわけにもいかないのだ。

父が生きていてくれたら、なにか違っただろうか。ふとそう考えた。

保険の代理店をやっていた父は、ミワが小学三年生の時に交通事故で亡くなっている。そのため父の記憶はほとんどない。

唯一、残っている記憶。それは自分を膝に乗せて、楽しい話をいつも聞かせてくれていたことだ。あれは、絵本を読んでいてくれたのだろうか、その内容については思い出せない。ただ、父の膝で話を聞いていると、いつもワクワクするような気持ちになったことだけは覚えている。

母親によるとずいぶんバイタリティーにあふれた人だったようだ。

母と出会った当時、若いころは小説家を目指していたらしい。しかし母と付き合い始めると当時、日本に進出したばかりの外資系保険会社のセールスマンになった。

最初はごく普通の成績しか収められないセールスマンだったが、ある時期を境に驚くほどの売り上げを記録するようになった。

そして「Million Dollar Round Table——〇〇万ドルの円卓会議」と呼ばれる、世界中の卓越した生命保険と金融サービスの専門家だけが入ることのできる組織にも選ばれるほどになったという。

今も有名女優やアイドルを起用したコマーシャルなどでその名前を目にする外資系保険会社で父は、伝説の人物となっていると母から聞いた。

その外資系保険会社から独立して、保険の代理店を立ち上げた後も順調に業績を伸ばし、十数人の従業員を抱えていたらしい。

一父が亡くなったのはミワの九歳の誕生日、クリスマス・イブの夜だった。みぞれ混じりの雨が午後から雪にかわった日だった。父が運転する車は道路に飛び出してきた子猫を避けようとしてハンドルを切ったところでスリップし、電柱にぶつかった。

車内には救急車やパトカーの回転灯に赤く照らし出された大きなクマのぬいぐるみがあった。ミワにプレゼントするためのものだった。

父が他界してから母はずっとスーパーマーケットでパートをしながらミワを育て、大学にまでやってくれた。

父が残した貯金と保険金は、もう底を尽きかけているはずだ。ほんとうなら私が母親に恩返しをする番だった。しかし今のミワには仕事も貯金も、永久就職先も、夢さえもなかった。

一夕方、ミワが一階のダイニングに降りると玄関のドアが静かに開き、母がパートから帰ってきた。

「ただいま」

つぶやくようにいって靴を脱ぐと、母はバッグをリビングに置き、キッチンに行って二人分のお茶をいれた。ダイニングに清々しい緑茶の香りが漂った。

「ちょっといい？ ミワにね、話があるのよ」

そういいながら備前焼の湯呑をテーブルに置いて、母は家の中を見渡した。

ミワの年齢とほぼ同じ、築三十年近くたっている家は母の手入れが良いのか、その築年数を感じさせないほど、きれいなままだ。

家があるのは横浜市の中心地からは思い切り離れた場所で、今でこそ住宅地となっているが父が家を建てた当時、周りは畑だらけだった。

それでも父は、太平洋を見下ろせる高台にある、この場所がひと目で気に入ったという。

当時、父はすでにトップセールスマンとして活躍していて都内に家を建てることもできた。しかし顧客でもあった建築家に頼み、まもなく生まれてくるミワを、美しい景色と自然の中で育てるために、この家を建てたというのだ。

その建築家はその後、日本を代表する大御所となり、その初期作品の一つとして、この家は雑誌にも掲載されたことがある。ミワにとっても自慢の家だった。

ゆっくりとお茶をすすった母は、ひとつ大きく息をついて湯呑を置いて、封筒から紙を出してミワに見せた。そこには「横浜地方裁判所」、そして「競売開始決定通知」という文字がプリントされている。

「なによ、これ」

ミワが聞くと母は意を決したように話を切り出した。

「この家ね……競売にかけられるの」

突然の母の言葉に、ミワは胸を鋭いもので貫かれたようで口に含んだお茶を吹き出しそうになった。

「どうして？ この家のローンはお父さんが死んだとき、すべて保険で支払ったはずでしょう」

「そうだけど、逗子のタカシさんがね……」

逗子の叔父、父の弟でいろんな事業に手を出しては失敗しているという話を聞いたことがある。

父の死後、父親参観日にいつもさみしい思いをしていたミワのため、母が来てくれるようお願いした日も二日酔いで現れ、恥ずかしい思いをさせられた。大嫌いな叔父だった。

たしか母も叔父とは一度、大喧嘩していたはずだ。法事の時に、父の形見ともいえる大事なお酒を勝手に飲んだことが原因だったらしい。そんな叔父に一体、なぜお金を貸したというのか。

「あたらしい会社を興すから、どうしてもお金が必要だって。今度は絶対にだいじょうぶだからって、土下座までするものだから。それでこの家を抵当にいれてお金を借りてあげたのよ。でも、やっぱり……」

「どうして、逗子の叔父さんなんか、お金を貸しちゃったのよ」

いってはみたが、今更どうしようもないことだった。昔からそうだった。長崎の裕福な商家に生まれたお嬢様育ちの母は人を疑う意識が希薄なのだ。

「借金はいくらなの？」

「千五百万円、そんなお金、もううちにはないからねえ」

諦め切ったような表情で母がいった。

美和が推察したとおり父が残した貯金や保険金ももう底をついていた。母の実家の商家はすでに廃業していて頼れる親戚もない。

「どうするのよ？」

「アパートでも借りるかねえ。まあ、なんとかなるわよ」

母は最近めっきり増えた白髪交じりの髪を撫でつけながら力なく笑ったあとで、厳しい視線を向けた。

「ミワも早く、あたらしい仕事を見つけるなり、結婚するなりしてちょうだい。もう、ここにはいられないんだから」

お父さんが自分のために建ててくれた家、母と二人で暮らしてきた家がなくなってしまう。

悔しさで泣き出しそうになっていた。自分が頑張ってたら借金だって代わりに払っていくことができたかもしれなかった。

それなのに今の自分にお金の問題を解決するなんて到底できない。三十も近いというのに、あかんぼうのころのように、自分はなんの役にも立たない。ミワは自分の無力さを呪いたくなった。

「なるほどなるほど、自分は何も持っていない、そうミワは考えているわけだ」

その日の夜も夢に現れたナポリタンはそう切り出した。

「実際にそうなんだもの」

「だけどね、ミワはとても大事な宝を持っているんだよ」

「宝って？」

「心、だよ」

「そんなものお腹の足しにもならない」

ふてくされたようにいうと、ナポリタンは目を細めながらうなずいた。

「きのう、ぼくがいった言葉を覚えているかい？ 人間は、自分の考えているような人間になる。今のミワは、ミワ自身がこれまで心の中で考えてきた通りになっているんだよ」

「そうみたいね」

「いいかえれば、人が心の中で描いたことは、必ず現実のものになるってことさ。つまり `思考は現実化、するんだ」

「思考は現実化する？」

ミワはナポリタンの言葉を反芻した。

「だったら話は簡単だろ。なりたい自分を心の中で考える。それだけで、それは現実のものになるんだよ。」

ミワがお金持ちになりたいと考えれば、そうなる。例えば年収を一億円にしたいと考えればそうなるんだ。

お金だけじゃない、ミワがみんなから才能を認められたいと考えれば名声が手に入る。ミワが理想の男性と結婚したいと考えれば、そうなるんだ」

ミワはあっけにとられて反論した。

「あのねえ、そんなに簡単に人生が思い通りにいけば誰も苦労しないよ」

「なるほどなるほど、そう考えるのも無理はない。ぼくも最初、ピッツバーグでカーネギーからそう聞かされた時は半信半疑だった」

「カーネギーって誰よ」

ナポリタンは驚いて目を見開いた。

「まさか！ アンドリュー・カーネギーを知らないのかい？」

スコットランドからやって来た、貧しい移民の子でありながら、一代でアメリカの鉄鋼生産をほぼ独占し、アメリカ最大の富豪のひとりとなった人物を。自分の築いた富を、つねに社会に再分配することを考え、カーネギーホールなどを建てた、あの偉大なる人物を！」

ナポリタンは困惑している。

やれやれとミワは思った。カーネギーホールを建てた鉄鋼王のカーネギーの名前くらい聞いたことがある。最初からそういえばいいのだ。

「そのカーネギーがあなたに `思考は現実化する、と聞いたわけね」

ナポリタンは少年のような笑顔を取り戻して話を続けた。

「そうなんだ。そしてカーネギーは、あらゆる成功者に共通する、ある秘密を研究してみないか

といった。それからぼくはカーネギーから紹介された、何人もの成功者にインタビューを繰り返した。そしてある共通点を見つけたんだ。まさにカーネギーのいうとおりだった。彼らは心で願うことを現実化させていた、この世のあらゆる成功者はそうして夢を叶えていたんだ」

ミワは皮肉っぽい笑を浮かべながらこういった。

「心で願えば現実のものになる、ねえ」

「まさにその通りだ」

「それじゃあ、私が今月中に千五百万円が欲しい、そう心の中で願えば、それが現実のものになるってわけ？」

ナポリタンは戸惑ったような顔見せた。

「ふむ、不可能ではない。実際にガンソーラスという牧師は一週間以内に百万ドルを手にとると心に決め、それを現実のものにしたのだからね。ただし、それは彼に明確な目標があり、そのための準備をしてきたからだ」

「私とお母さんには今、明日にでも千五百万円が必要なの」

ミワは家が来月にも競売にかけられる事情を話した。

「なるほどなるほど」

ナポリタンは笑顔を取り戻してうなずいた。

「それならばミワ、まず今月中に家を取り戻そうと心の中で強く願うことだ。そうすれば奇跡は必ず起きるはずだ」

「私が心で強く願えば、宝くじでも当たるってわけ？」

「そうじゃない、きみが心に強く願う、そうすれば見えなかったものが見えてくる。そして不思議な力で、協力者、を呼び寄せるんだ」

奇跡は、その翌日から起きはじめた。

それは「私とお母さんは絶対に、この家を手放さない！」そう部屋の中で何度もつぶやいていた時のことだった。

ミワの携帯電話に着信音と共に見知らぬナンバーが表示された。出てみると男の声がした。

「ルリガキさんの携帯でしょうか。本日、午後二時にお約束をしております。ファイナンシャルプランナーのセキグチと申します。保険相談の確認でお電話いたしました」

その声でミワは先月、保険の見直しサイトの無料相談に申し込んでいたことを思い出した。保険に入るつもりも、そんな金銭的余裕もなかったが、無料相談を受ければ一ポイント一円に換算されるカードのポイントが七千ポイントもらえる、つまり七千円分のショッピングができるのだ。セコい話だが、それが目的だった。

だが今はそれどころではない。ミワはあやまってキャンセルしようとした。しかし、そのとき、ミワの心になにかが引っ掛かった。

「きょうはご都合が悪いですか？」

しばし沈黙していたミワに関口と名乗る男が聞いた。とっさにミワは「いえ、お願いします」といったあとで、約束の場所を高円寺から渋谷に変えてもらって、電話を切った。

時計を見た、午前十一時。渋谷まで二時間はかかるが、間に合わなくはない。

急いで着替えを済ませると電車で飛び乗り、乗り換えながら渋谷を目指した。

ファイナンシャルプランナー、お金の専門家なら我が家のピンチを救えるかもしれない。そう考えたのだ。

待ち合わせ時間の五分前、ミワは約束の場所に指定された渋谷・道玄坂のファミレスのドアを開いた。

レジから一番近い場所にグレーの上質なスーツにパープルのネクタイをした男がいた。電話で教えてもらった通りの場所と服装だった。

「セキグチさん？」

近くに行って声をかけると、セキグチは笑みを浮かべながら立ち上がり名刺を差し出した。四十代の半ばくらいだろうか、ブラッド・ピットを和風だしで二時間ほど煮て、一夜干ししたような、なかなかのイケメン中年だ。

名刺の裏側には、扱っている保険会社の名前がいくつも書かれている。その一番上には父親が昔、勤めていた外資系保険会社の名前もある。

セキグチはCFPというファイナンシャルプランナーとしての活動と同時に、複数の保険会社と契約している保険代理店を運営していて、保険の見直しサイトから依頼され、ネットで申し込んできた客の相談に乗っているという。

「亡くなった私の父も保険代理店を運営していたんです。もともとはこの会社にいたんですけど、独立してー」

ミワは名刺の一番上にプリントされた外資系保険会社の名前を指差した。

「偶然ですね、私も最初はここの専属代理店から今の仕事をはじめたんですよ」

そういつてからセキグチは水の入ったコップを口につけようとしていた動きを止めた。

「あれ？ ルリガキさんって、もしかして、あの？」

父のフルネームを告げると、セキグチは大きく目を見開いた。ミワの父は今も、その外資系保険会社で、その珍しい苗字とともに語り継がれていて、代理店の研修の際に必ず紹介されているという。ミワは父を誇らしく思った。

だが、今は父の話よりも、その父が残した家を守ることが最重要事項だ。意を決してミワはセキグチにいった。

「正直にいます。実は今回、相談に乗っていただきたいのは保険のことではないんです」

ポイント目当てで保険相談を申し込んだことを正直に告げ、セキグチにあやまった上で、今、自分の家が置かれている状況を説明した。

今の家は父が自分のために建ててくれたものであること、そんな家をどうしても守りたいと考えていることなどをミワは語った。

セキグチはうなずきながらメモを取っている。そしてしばらく目を閉じて考えたあとでこういった。

「残念ですが……我々の仕事は保険を見直して、ご相談者のかたに無駄な保険料を節約してもらって、安心をお届けすることなのです。ですから保険以外の相談は原則としてお受けできないのです」

断られて当たり前だった。ポイント目当てで保険相談を申し込んでおいて、保険以外のことを相談しようなんて、たしかにそんな身勝手な話はない。わかっていながらミワはいった。

「失礼なことは承知しています。でも私と母は、どうしても家を守りたいんです！」

「一申し訳ありませんが、失礼します」

セキグチは席を立てて店を出ていった。

その背中をミワはただ見送るしかなかった。普通に働いている人なら誰もただでさえ忙しい年末、社会でちゃんとビジネスをしている人の時間を無駄に使わせたことに罪悪感のようなものを覚えた。

肩を落としながらミワは席をたって出口に向かおうとした。すると、目の前にはなぜかセキグチが立っていた。急いで戻ってきたのか、息を切らしている。

「忘れ物ですか？」

「忘れ物……、そうですね、とんでもないものを私は忘れていたのかもしれませんが」

セキグチはミワに席に着くようながすと、言葉を続けた。

「正直に申しあげると、我々は保険の見直しサイトから相談者、おひとりを紹介されるたびに三万円を支払う契約になっているんです。あたらしい保険に入ってもらえれば、それを上回る手数料が入ってきますからね。見直しといえば聞こえがいいのですが、ようは自分に手数料が入るよう乗り換えてもらうってことです。ですから新しく保険に入るつもりもない相談者なんて相手にしてられない。さっき私はそう考えていました。しかしー」

セキグチはうつむいて小さく首を振りながら言葉を続けた。

「この仕事に就いたころの原点を忘れていたようです。詐欺まがいの保険もある中で多くの人によりよい保険を紹介したい。それが原点でした。ファイナンシャルプランナーの最高峰、CFP

になるための勉強もそのためでした。CFPになったあとは保険だけでなく、自ら学んだ金融の知識を多くの人に役立てるつもりでした。

それなのにいつしか、手数料を稼ぐための保険屋になりさがっていたようです。

店を出たあと、懸命に家を守ろうとしているルリガキさんの言葉を思い出して一それで引き返してきたんです。

ルリガキさんの熱意が、私が忘れていたものを思い出させてくれたようです。伝説のセールスマンの娘さんというのも、きつとなにかのご縁です。微力ですが是非、力にならせてください」

そう言ってセキグチは右手を差し出してミワに握手を求めた。

約束通り、セキグチはその翌日、青いボルボのステーションワゴンに乗って、横浜市の郊外にあるミワの実家にやってきた。

そして家が太平洋を見下ろせる高台にあることを確認すると「これはひょっとしてひょっとするかも」といいながら、あちこちに電話をかけた。

セキグチはパートから帰ってきた母にも詳しく事情を聴いたあと、さらに何本も電話をかけた。

やがて恰幅のいいひとりの男がシルバーのベンツに乗って現れた。カナイと名乗ったその男は、セキグチや母といろいろ話し合ったあとで親指を立てながらセキグチに「いいね！」とだけ、いい残して帰っていった。

そしてセキグチは「ルリガキさん、もしかしたら家を手放さなくても済むかもしれませんよ」といい残し去っていったのだ。

セキグチから朗報がもたらされたのは、正月休みが明けてすぐのことだった。

「ルリガキさん、いけます！ 任意売却とリースバックで」

携帯のむこうでセキグチは興奮気味にそう叫んだ。

ミワにはよくわからないのだが「任意売却」という方法で競売を避け、家を守れるらしい。

まず債権者である銀行の許可を取った上でセキグチの顧客のひとりである横浜の不動産業者、カナイというあの恰幅の良い人物にいったん家を買って取ってもらう。これが「任意売却」だ。そうすることで、家は銀行の担保ではなくなるため、競売にかけられることもない。市場価格の七割ほどでしか落札されない競売よりも、市場価格で取引される任意売却のほうが債権者の銀行としても都合がいいらしい。

とうぜん家の権利は、不動産業者のカナイに移るが、そのあと、ミワと母親は不動産業者に十万元の家賃を支払って暮らす。それを「リースバック」というらしい。ミワと母親に資金が調べば、カナイからあとで買戻すこともできるという。

横浜の中心部からは離れているが海が見渡せる最高のロケーションだったことが幸いした、そうセキグチはいう。

十万元の家賃はたしかに大きな額だ。しかし母のパート代にプラスして、ミワが働いて負担すれば、払えないこともない。

ただし、賃貸料の支払いが続けられなくなればカナイに家を引き渡すことになるそうだ。のんびりとはしてられない、早く仕事を探さないと……、安堵のあとに、お腹の下のほうから突き上げてくるような焦りを覚えていた。

とにかくセキグチと出会ったことで家が競売にかけられることはさけられた。父がミワのためにロケーションのよい場所を選んでいたことが幸いした。

家を手放すことを覚悟していた母は後日、書類を届けに来たセキグチに何度も頭を下げた。そしてセキグチから、父の存在が彼を動かすきっかけとなったことを聞いて、仏壇に手を合わせた。

「なるほどなるほど」

その夜、ミワが一連のできごとを話すと、ナポリタンは愉快そうに笑った。

「やはり、専門知識、は必要な要素だな、ダービーの叔父さんも諦める前に専門家の意見を聞くという知恵があれば、何百万ドルもの金鉱脈に出えたのだが」

「誰よ、それ」

「ミワのお父さんやミスター・セキグチと同じ、優秀で熱意あふれる保険のセールスパersonさ。ミワもなにかを目指すなら、まず専門知識を学ぶことだ。それらは材料でしかないが、効果的に組み合わせれば、きみが想像力の翼を羽ばたかせる時の力になるだろう」

「なるほどなるほど、覚えておくよ」

ミワはわざとナポリタンの口癖を真似ていった。

「でも、この一件でミワは重要なことを学んだ、そうじゃないか？」

「どういうこと？」

「まずミスター・セキグチからの電話、これはきみが家を絶対に手放さないと叫んでいるときだった。これをどう思う？」

「保険の見直しサイトに申し込んだのは、ずいぶん前から偶然でしょ」

「でも普段のミワだったら、それどころじゃないって断っていたんじゃないかい？ 彼の声になにかが引っ掛かった。おそらくミスター・セキグチの声のトーンから、きみは彼が与えられた仕事をこなすだけの男でない、プラスアルファの魔法、が使える人物であることを感じ取ったんだ」

「プラスアルファの魔法？」

「夢を叶えるための魔法のひとつ、期待以上の仕事をする事で成功を近づけるノウハウだよ」

「それで？」

「ミスター・セキグチも、きみの情熱を込めた話に引き込まれた。熱意、エンスージアム、は人を動かす。それにきみの心には、お父さんの建てた家を絶対に手放さない、という明確な目標と信念があった。だからこそきみの問題は解決できたんだよ」

「そうかしら」

「そういえば、さっき話したダービーも同じようなできごとを目撃しているよ」

ナポリタンは自らが、そのダービーから聞いたという話をしゃべりはじめた。

「ある日の午後のことだった。ダービーが叔父の仕事を手伝って古いひき臼で小麦をひいていた時のことだ」

「ダービーさんの叔父さんは何の仕事をしていたの？」

「大農場の経営者さ、大勢の黒人小作人を抱えた」

「まだ人種差別が残っている時代ね」

「そうだね。そのとき、静かに粉ひき小屋のドアが開いて黒人の小さな女の子が入ってきてこういったんだ。『ママが病気なの、だから五十セントもらってくるようにっていったの』ってね。しかしダービーの叔父はにべなくもなく断った」

「ケチなやつ、五十セントって一ドルの半分でしょう」

「ダービーの叔父はケチでおまけに短気ときている。しかし帰れといっても、女の子は一步も動かなかった」

「どうしても五十セントが必要だったんだ」

「母親が病気で薬を買うお金が必要だったんだらう。いうことを聞かない女の子に、業を煮やしてダービーの叔父は『帰れといったのがわからんのか。早く行かないとこらしめるぞ!』と怒鳴った。そして天秤棒を手に女の子のほうに歩いて行ったんだ」

「まさか、叩いたりなんかしないよね」

「ダービーの叔父は、そのつもりだった。しかし彼が彼女の前に行きつくよりも早く、女の子が一步、前に出てきっぱりとした声でこういったんだ。

『ママにはどうしても五十セントがいるの!』

ダービーの叔父は立ちすくんで、しばらく彼女の顔を見つめていた。やがてポケットから五十セントを取り出して彼女に渡したんだ。そして、女の子は、お金を受け取ると叔父の目をじっと見たままゆっくりと後ずさって小屋から出て行った」

「小さな女の子が大の大人を打ち負かしたわけね」

「ミワもその女の子と同じような魔法を使ったんだよ」

「どういうこと？」

「そのうちにわかるさ、この話には、成功のためのいろんな要素が含まれている。そしてミワが使った力も、その中の要素のほんの一部に過ぎないんだ。それらの要素を実践していくことで、必ず、夢は現実のものになる」

「よく、わからないわ」

「そりゃそうさ、まだミワは夢を持つというスタート地点にすら、ついていないんだからね。すべては夢を持つことから始まる。それも明確な目標をね。

そして人が心の中で描いたことは、必ず現実のものになる。だからこそ心にどんな夢を描くかで、人生は決まるんだよ」

「この家を買戻したいという夢も叶うわけ？」

「たやすいことだろう」

「お金の事で苦労しっぱなしの、今の生活からも卒業できるの？」

「その通りだ」

「世界征服だってできるってこと？」

ナポリタンは苦笑しながら答えた。

「きみが望むならばね。ただ社会正義に反する夢は実現が難しい。それだけじゃない、もしミワが最高のパフォーマンスを発揮したいならば、夢を設定するとき、三つのことを守ってほしいんだ」

明るく日の夕方、ミワは日比谷にある超一流ホテルの宴会場の入り口にいた。

朝方、かつて高円寺のシェア・ハウスでいっしょに暮らしていたノリコから、どうしても、ある新年会に付き合ってほしいと電話があったからだ。

ノリコの用事といえば、おそらく、例のマルチ商法に関することだ。普段のミワなら断っている。

だが、今は家賃のためにも、一刻も早く稼がなければならない。昔ノリコがいていたように、今の生活を抜け出せるなら、あらゆることを先入観なしに見聞きしてみようと考えたのだ。

説明会場と書かれた宴会場の入口の受付には、スーツ姿の男性たちとドレスアップした女性たちが陣取っていて「ようこそいらっしゃいました」と笑顔で迎えている。

会場が一流ホテルと聞いていたので、母に借りたスーツを着てきたが、彼女たちのきらびやかなドレスと比べると惨めな思いは隠せなかった。

ノリコはドレスアップした女性たちの中にいた。その衣装を見てミワは驚いた。金色のドレス、紅白歌合戦に初めて出場する演歌歌手のようだ。ノリコはミワを見つけると小走りに駆け寄ってきた腕を掴んだ。

「ミワ、来てくれたのね」

ノリコは、次々に「幹部」という人を紹介した。なんの幹部だかわからないが、いかにも高そうなスーツを着て一様に日焼けした爽やかな笑顔でミワに握手を求める幹部たち。こうしたもてなしを受けるのはひさしぶりで、ミワは少々面食らった。

会場に入ると、耳をつんざくような音量でロックがガンガンと鳴り響き、こうこうと照明器具が光を放っている。百人以上、集まっているようだ。その頭上を横断するのは世界各国の万国旗、運動会みたいだった。

前方のひな壇には、毒々しい紫色をしたジュースの瓶、そしてそれが入ったダンボールが山のようになり積み上げられている。

近づいてみると、その周りには幹部たちが外国旅行にいったときの写真パネルが飾られていた。あっけにとられてその写真を眺めていると、後ろからノリコが忍び寄ってきて耳打ちした。

「ここに写っている写真の人達は、本社から一ヵ月で何千万円もの配当金を受けとって、ご褒美の外国旅行をした人達なのよ。外国に別荘を持っている人もいるんだから。この人は先月、ベントのスポーツロードスターSLクラスをキャッシュで買って、この人は西麻布にマンションを……」

写真の人物たちのバブリーな買い物自慢を延々と続けるノリコ。左腕の手首には、キラキラと輝く可愛い時計がはめられていた。

貧乏なミワだが、それがパテックフィリップという数百万もする高級な時計であることくらいわかる。美容室の雑誌でみたことがあるだけだが。

そのとき、突然、うるさかった音楽が止まり、照明が落とされた。いきなりスポットライトが、日焼けした茶髪でロン毛の男に当たる。

ジャニーズ系の松崎しげるといった感じだろうか。ハンドマイクが握った茶髪男は大声で叫んだ。

「こんばんは！」

会場からも「こんばんは！」と元気のいい返事が返る。男は一層、声を張りあげた。

「幸せですか！」

再び会場から「幸せです！」と大合唱が返えってくる。

「こだまか！」そう、つっこみたくもなったが、すぐに何処からともなく拍手が湧き起こり、その拍手の渦は大音量となって会場全体を包みこんだ。

ノリコもシンバルを叩くサルのおもちゃのように興奮し、歯をむきだしながら手を叩いている。

するとマイクを持ったジャニーズ系の松崎しげる、`ジャニ松、は会場の拍手を制しつつ、おもむろに、用意されたホワイトボードに向かい、水性ペンのキャップを外すと、軽快かつ乱暴に、文字を書き殴りながら、チベット産の植物ジュースがいかに健康に良いかを語りはじめた。

これを飲むことで末期の癌や痴呆症、さらに近眼や水虫までが治ったという。

だったら医者も薬もいらないうらう、そういいたくなかったが、男の口調にはどこか説得力があった。

茶髪のジャニ松は「こんなすばらしいジュースを広めないのは悪だ、いやはやサタンの化身だ」と、いったあとで、ひときわ大きな声でこう叫んだ。

「このジュースは人を健康にして幸せにするだけじゃない、販売するあなたたちも幸せにするのです。発表しましょう！先月の最多ボーナス獲得賞、なんと五百万円を稼ぎ出したMVPはフジタ・ノリコさん、あなたです！」

スポットライトに照らされたのは近くにいたノリコだった。

演歌歌手が音楽賞を受賞したときのような、ガッツポーズで応えるノリコ。会場からどよめきのあとで、大きな拍手が湧き上がる。

「フジタさん、いやノリコは、半年前まで月収十万円のフリーターだった。しかし今や、その五十倍の収入になったのです」

ノリコは照れた笑顔を浮かべながら、会場で羨望の顔している人々に両手を振っている。

ミワよりもピンボーだったノリコが今、月に五百万円も稼いでいる。にわかに信じられなかった。

そしてマイクを握った茶髪のジャニ松は、最後にこう締めくくった。

「人生は一度しかない。あなたもやってみないか。あなたもやれる。否、あなたならやれる！人生は夢を叶えるためにある。さあ今、決断しよう。成功のチャンスは今、あなたの前にある。夢を叶えることこそ人生なんだ。夢は必ず叶うんだ！」

そう叫ぶと、男は感極まった様子でなぜか泣き出した。周囲にはつられて泣き出す人たちもいる。ノリコに至っては鼻水までたらして号泣している。

最初、違和感を覚えていたミワも最後は感動のようなものを覚えて、なぜかもらい泣きしそうになった。これが集団心理の怖さなのだろう。

ただ最後の「夢は必ず叶う」という叫び、これは最近、夢の中で出会うナポリタンのいっていることと、同じような気がした。

会場の出口に並べられた机では、入会者の受け付けを行っている。商品購入のために直ぐに金を払う人もいれば、署名だけして後日の払込みの契約をして帰る人もいる。

もしかしたらこれはすごいチャンスではないのか？ そう考えていた。ナポリタンはお金持ちになりたいと考えれば、そうなるという。ならば、ノリコのように月に五百万円を稼ぐことを頭の中に描けば、それは現実のものになるのではないか。

立ったまま目を閉じて、そのときの様子を想像してみた。月収五百万円、ノリコのような高級腕時計、そして写真の幹部たちのような豪華な海外旅行……。

しかし、それらは心をさほど、ときめかせはしなかった。

「私が欲しいのは、そんなものじゃない」

そうひとりごちて踵を返し、一階へと降りるエスカレーターのほうへ歩みだした。そんなミワの元にあわててノリコが駆け寄ってきて、こういった。

「ミワもやるよね、いっしょに夢を叶えましょう」

ノリコは涙ぐみながら腕をつかみ、すがるような目で見つめている。

「やっぱり、やめておく」

「ミワ、変わらなきゃ、今のよう暮らしでいいの」

「よくない！ よくないよ！ でも、私の夢は……」

そこまでいって、次の言葉を飲み込んだ。今の自分は夢を語るができなかった。

それでもナポリタンの顔を思い出して「ある人に相談して決める」といってから、ノリコの腕を振り払った。

ノリコは眉間にしわを寄せて、舌打ちをした。構わず会場を後にした。ナポリタンを信じよう、そうミワは心に決めた。

「なるほどなるほど」

日比谷のホテルでのできごとを話すと、いつもようにナポリタンは愉快そうに笑った。

「夢は必ず叶う、って、あなたと同じような事を叫んでいたわ」

「いろんな宗教も訴えてきた、ひとつの真理だからね」

「あなたのいっていることは宗教と違うの？」

「あいにくぼくはいかなる宗教や政治思想にも与しない」

ナポリタンはきっぱりといった。

「それでどうしてすぐに入会のサインしなかったんだい？」

「昨日、あなたがいったでしょう？ 夢を設定するときは三つのことを守れって」

「覚えているかい？」

「他人の権利を尊重できる夢であること、社会正義に反する夢ではないこと、自らがほんとうに価値あると思える夢であること。ノリコが勧めてくれたビジネスは、そのどれにも当てはまらなかった」

「ミワはいい子だ」

小学生を教える教師のような口ぶりでナポリタンは目を細めながら言葉を続けた。

「いいかい、もしミワがそのチベット・ジュースとやらを売って、月に五百万円、いや一千万円のボーナスをもらおうと心に決めて行動すれば、それは現実のものとなるだろう」

「ただ単にお金儲けが目的でも、それを願えば叶うの？」

「そうだ。そもそも人間の脳は、それがいいことでも悪いことでも繰り返し植えつけてやれば、それを現実のものにするためにいろんな手助けをしてくれる」

「ノリコの誘いに乗ればよかったの？」

「ミワのいうマルチ商法、マルチレベルマーケティングは決して悪いものばかりではない。アメリカではそれで大金持ちになった人も少なくない。でもどうだろう。ミワはチベット・ジュースを売って利益を上げることに、心のどこかで抵抗を覚えなかったかい？」

「抵抗はあるわよ。だってとりあえず、早い者勝ちの世界でしょ。後から入るほどに不利になってやがて行き詰まるだろうし、そんなことを友達に押し付けて、お金もうけしようなんて思わない」

「ミス・ノリコはそのジュースが、ほんとうに人のためになると思ってやっているのかもしれない。でも、ミワが抵抗感を覚えるのならば、やらないほうが賢明だ。心に抵抗がある夢を現実化させようとした場合、きみは、大変な努力をして自らの潜在意識をコントロールする必要に迫られるだろうからね」

「潜在意識？」

「頭の中に眠っている召使いの巨人だ。きみのためになんでも運んできてくれる」

「よくわからないわ」

「まあいい、話を戻そう。目標を設定するときに、心に抵抗があるものを選べば、ミワの中に眠れる巨人を説得する際に、多くの時間を必要とすることになるんだ。どうしても金銭的な成功をおさめたいなら、そうすることもぼくは否定しない。でもね、ぼくはミワに、まずもっともシン

プルな方法から試してほしいと思っている」

「シンプルな方法って？」

「好きなことをすることさ。それをやっているとき、もしくはそれができあがったときにミワがワクワクするようなこと。心から望む夢だけが足取りも軽く、きみを歩き出させるんだ。

さらにいえば他人の権利を尊重できて、社会正義に反するどころか、多くの人を助けたり、力になったりできる夢であればということはない。そんな夢、きみにはあるかい？」

ナポリタンのその言葉を聞いてミワは封印していた、ある夢のことを考えた。

ナポリタンにその夢のことを話そうと思った。だがすぐに弱気が襲う。

実はこれまでも何度か、その夢に挑もうとしたことがある。しかし、すぐに挫折した。そのうちに自分に才能がないことを自覚して、最近ではすっかり封印した夢だった。

「なるほどなるほど」

戸惑っているミワを見て、その心中を見透かしたかのようにナポリタンは深くうなずいた。

「まずは頭の中に張り巡らされたクモの巣を取り払うことだ」

「頭の中のクモの巣？」

「夢の実現を邪魔する否定的な考え方だよ。それらは `どうせ、 `しょせん、 といった言葉から始まるものだ」

ミワは黙った。 `どうせ、 `しょせん、 。それらは口癖のように使っていた言葉だったからだ。

「様々な否定的な感情がクモの巣のように張りめぐらされ思考の中で絡み合えば、クモの巣にひっかかった虫のように人はもがき苦しむ。そしてもがけばもがくほど罌から抜け出すことがむづかしくなるのだ」

ミワは蝶になった自分が大きなクモの巣にからめとられてもがいている姿を想像してぞっとした。

「最初にぼくはいったよね。『人間は、自分の考えているような人間になる』『人が心の中で描いたことは、必ず現実のものになる』って。それを信じられるならば、夢を設定するときには誰にも、なんの遠慮をする必要はない。きみがずっとやってみたことをやればいい」

「でもー」

「いいかい、ミワ」

ナポリタンはミワの言葉を制して言葉を続けた。

「人類の弱点は、あまりにも `不可能、 という言葉に慣れすぎていることなんだ。もし、きみが何にでもなれるとしたら、何になりたいんだい？」

「私は.....多くの人を感動させるシナリオ・ライターになりたい！」

思わずそう叫んだ。そして自分の声に驚いて夢から覚めた。

窓の外には晴れ渡った空にいくつかのカラフルなビニール製の凧が舞っている。子供たちはまだ正月気分を満喫しているようだ。

母によれば父もミワを連れてよく凧揚げをしていたという。

風に揺れる凧を眺めながら、母が作ってくれた七草粥をいただいたあとで、ミワは二階にある自分の部屋へ向かい、本棚から一枚のDVDを取り出した。

『It's a Wonderful Life』、邦題は『素晴らしき哉、人生！』。一九四六年にアメリカで作られた映画だ。

監督はフランク・キャプラ。その年のアカデミー賞では作品賞を含めた五部門にノミネートされたが無冠に終わった。興行的にも決して成功とは言えなかったようだ。

しかし、その評判は口コミで広がり、アメリカでは、やがて毎年、年の瀬になるとテレビで放映されるようになった。それを見た若い世代から再評価され、今では、誰も知らない人がいない名作となっている。

DVDプレイヤーに滑り込ませ、何年かぶりにこの映画を見た。

映画は鐘が鳴り響く映像から始まった。キャプラたちが設立した独立映画製作会社「リバティ・フィルムズ」のオープニングだ。

紙芝居をめくりながら、出演者やスタッフを紹介する映像の後、映画はジェームズ・スチュアートが演じるジョージ・ベイリーの暮らす街の看板から始まる。

ジョージは子供のころから、生まれ故郷の小さな町を飛び出し、世界一周旅行をしたいという夢を抱いていた。

しかしカレッジを卒業して、その夢を叶えようとした直前、住宅会社を経営する父親が他界して断念した。

父親は、町の貧しい人々に低利で住宅を提供して尊敬を集めていたが、町のボスで、銀行家のポッターから目の仇にされ、様々な圧力を加えられた末に過労で倒れてしまったのだ。

ジョージは、後を継いで社長になり、やがて幼馴染みのメリイと結婚する。

そして新婚旅行で今度こそ、旅行に出発しようとした矢先、世界を襲った経済恐慌のため、中止を余儀なくされた。旅費として持っていた五千ドルを貧しい預金者たちに払い戻してやったためだ。

新婚旅行はできなくなったがジョージは幸せだった。次々と四人の子供に恵まれ、住宅会社の業績も伸ばしていたからだ。

しかし、そんなジョージをポッターはやはり敵視した。そして卑劣な罠を仕掛けて、ジョージの会社の経営を立ちいかなくしてしまった。

絶望したジョージは橋の上から身投げしようとした。その時だった。一瞬早く、奇妙な老人が彼のそばで身投げした。ジョージは夢中になってその老人を救う。

老人の名はクラレンス、二級の天使で翼をもらうためジョージを救ったのだと語った。生まれてこなければ良かった。そうもらすジョージを、クラレンスは望みどおり、ジョージの生まれて来なかった幻の世界に連れて行った。

そこは人情も道徳もない幻滅の世界、ジョージはたまらなくなって元の世界へ戻してくれと絶叫する。

現実に戻ったジョージ、だが彼に身投げを決意させた窮状は何も変わっていない。

しかし自宅に戻った彼を待っていたのは、彼の窮状を知り、それぞれに寄付金をもって、家に押しかけて来た街中の人々だった一。

あらためてすごい映画だと思った。思いっきり幸せなエンディング。「蛍の光」を大合唱するラスト・シーンは、映画史上、最も気持ちのいいハッピーエンドだろう。

さわやかな風が胸を吹き抜けていくようで心が温くなる。これが映画の素晴らしさだ。これが人生の素晴らしさだ。

こんな映画のシナリオが書きたい。ミワはあらためて、そう思った。

シナリオ・ライター。それこそずっとやってみたかったことだった。

父が大好きで何度も繰り返し、みていたという映画、『素晴らしき哉、人生!』。高校に入学した年、母からそう聞いてレンタルビデオ店でDVDを借りてみた時、ミワも感動で涙が止まらなかった。

父も同じシーンで心を打たれたのだろうか、ミワはすでにこの世にいない父と感動を共有できたような気もしていた。

以来、自らDVDを購入して何度も見返している。この映画のような多くの人を勇気づける、すばらしい脚本を書いてみたかった。

しかし、キャプラの凄さを実感すればするほど、自分とのギャップが際立ってくるのも事実だった。おそらくその差は、ニューヨーク・ヤンキースのイチローと近所の野球少年くらいあるだろう。

部屋の本棚、そこには高校生の時に買った、数冊のシナリオの技術に関する本がある。しかし、それらを読んだところで一本のシナリオさえ、書き終えることができなかった。

高校の進路相談の際、勇気を出して担任教師に夢を打ち明けたことがある。『素晴らしき哉、人生!』。あの映画のような世界中の人々を感動させるシナリオを書きたい、そう話したのだ。映画だけじゃない、音楽や小説、そして絵画に演劇にダンス—それらには時空を超えて、人々の心を揺さぶる力がある。そうして、人々を感動させる芸術を生み出す、力の源泉を学びたかった。

しかし、そのとき、教師はミワの現代国語の成績を引き合いに出しながら鼻で笑ったあと「馬鹿げた夢ばかり見てないで、もっと現実を見ろ」とあきれたようにいった。

それでも母親と相談の上で、公立の芸大を受験することを決めた。しかし受験の前日にインフルエンザを発症して断念した。それで結局は、無難かつ入れそうな大学を選んだ。

ナポリタンは「頭の中のクモの巣を取り払え」といった。しかし自分のような才能もない人間がどうやって夢を叶えればいいのか。どこから手を付けてよいのかもわからない。

ミワは外国の見知らぬ街で迷子になったかのような心細い気持ちだった。夢に向かって歩むどころか、その入口にすらたどり着けないのが現状なのだ。

「なるほどなるほど、ミワは夢に至るまで道のり `ロードマップ、が思い浮かばないというのだね」

「道のりだけじゃない、入口すらわかんないよ」

ナポリタンは首をひねり、不思議そうな顔をしている。

「しかし、ミワはゴールを持っているはずだ。多くの人を感動させるシナリオ・ライターになる、というゴールをね。だいじょうぶ、今はまだゴールが明確でないから、どこへ向かって走っているのか、わからないだけなんだ。

ドライブだってそうだ。きみが今、シカゴにいてグランドパークへ行きたいとする。でもグランドパークがどこにあるか、はっきりとわかっていなければ、アクセルを踏むこともハンドルを切ることもできない。ただただ途方に暮れて、シカゴの街でたたずむだけだ。だからこそ、ゴールを明確に決める必要があるんだよ」

「明確にって、どういうことよ」

「そうだな、まずはミワの夢の値段を決めようか」

ナポリタンはいった。

「値段って？」

「シナリオ・ライターになって稼ぐお金だよ。年収はいくらにする？」

「とりあえず、この家の家賃が払えて食べるのに困らなければいいよ」

「そうすると、ミワの家の家賃が払えて食べるのに困らないだけの年収しか手にできないことになるね。その程度の年収しか手にできないシナリオ・ライターは、果たして成功しているといえるだろうか。その程度の年収しか支払われないライターの作品は、多くの人を感動させているだろうか」

ミワは黙りこんだ。この家の家賃が払えて、食べるのに困らない年収といえば三百万円前後だろうか。その程度の年収のライターの作品が、広く世に支持され、感動を与えているとは考えにくい。

「目標を明確なものにするためには、まず手にしたいお金の額を、あらかじめ決めておくことがとても重要なんだ」

「じゃあ」思い切ってミワはいった。「一千万円！」

ナポリタンは苦笑している。

「ずいぶん控えめだね、ミワの友達のミス・ノリコは月に五百万円を稼いだんだろ。せめて、その五倍くらいの金額にしようじゃないか。どうだい、年収三億円を目指すってのは」

あ然として口を開けた。あいた口が塞がらないというのはまさにこの状態だ。ありえない、年収三億円なんてこれまで想像したこともない。

「ナポリタンは私をからかっているわけ？」

「なぜ、そう思うんだい？」

「だって、私の年収はこれまで最高でも二百万円に届かなかったんだよ。それなのに三億だなんて、ありえないでしょう！」

「なるほどなるほど、多くの人がそうなんだ。富はある日突然、まったく予想しない形で目の前

に現れる。だから人々は自分が富を得ていなかった時には、それが一体どこに隠れているのかわからない。だから、どうしても目標を低くしてしまう。でもねミワ、目標は高く設定すべきなんだ」

そういわれてミワは、夢のような金額をいってみた。

「年収、三千万円！」

ナポレオンは首をひねったあとで、「ぼくの好きな詩を紹介しよう」といって朗読をはじめた。

自分の人生を安く売ったものは
やがて蓄えが減ったとしても
人生はまったくビター文も支払ってくれない。
人生は雇い主と同じだ。
しかも欲しいだけの給料をくれる。
だが、ひとたび給料を決めてしまったら
もう売るべきものは何もないのだ。
あとはその給料の多寡と関係なく
困難な勤めに耐えていかなければならない。

しかし、どんなに惨めな仕事でも、
精いっぱい努力すれば
人生は請求しただけの報酬を喜んで支払ってくれるものだ。

「どうだい、ミワは自分自身の人生を賞味期限の切れたリンゴのように安売りするのかい」
この詩をいつかどこかで聞いたような気がした。思い出そうとするミワにナポリタンは言葉を続けた。

「じゃあ、せめて目標の年収を一億にしようじゃないか、これ以上、ビター文まけないよ」
年収一億なんて、三億と同様にまったく現実味のない数字だった。しかしナポリタンに根負けしてミワはいった。

「わかった、わかった。どうせ夢なら、大きく持ったほうがいいものね」

「おっと、`どうせ、は禁句だ。二度と使わないでくれ。それと、もうひとつ、大事な決め事があるよ。ミワは、いつまでにシナリオ・ライターとして年収を一億円にするんだい？」

「そんなこと、まだなくてもいいのにわかるわけがないじゃない」

「金額と同じで期限を決めないと、ゴールは明確に見えてこない。ミワは何キロ走ればいいのかもわからずに、マラソンを走るのかい？」

「二十年後とか……？」

「ゴールが遠いと、ときめかないし、計画も立てにくいよ、ミワは今、いくつなんだい？」

「クリスマス・イブが誕生日だから二十七になったばかりだよ」

「じゃあ三年後、三十歳の誕生日、クリスマス・イブまでにミワはシナリオ・ライターとして年収を一億円にする、これで、どうかな」

ナポリタンは目を輝かせ、ミワの顔を覗き込みながら小指を差し出して「約束だ」といった。ミワは、その瞳にうながされるように小指を絡ませた。途方もない、冒険の旅にでも出るかのような気持ちになって思わずこうつぶやいた。

「やれやれ、一体、どこから手を付けていいのやら」

「だいじょうぶ、きっと眠れる巨人が教えてくれるさ。まずミワがやることは、その目標を紙に書いて、いつも確認することだ。できれば毎朝、声に出して読み上げるといい」

「どんなふうに？」

「そうだね、例えば、こんな感じだ。『私は三十歳の誕生日までにシナリオ・ライターとして多くの人々を感動させる作品を世に送り出し、その見返りとして年収を一億円にする。そのためにできることが頭に浮かべばすぐにでも行動する』

そのときに重要なことがある。夢を叶えた時の自分の姿を思い浮かべ、一億円の年収がすでに自分のものになっていると考えること」

「一億円の現金なんてみたことないわ」

「こんな風景を思い浮かべてはどうだろう、ヒット映画の脚本家として映画雑誌の記者からインタビューを受けている自分。ミワのシナリオを絶賛する週刊誌の映画評。通帳を開いて今月の入金が一千万円だったのを確認する自分でもいい。そうした映像から始めて、やがて聴覚や触覚、嗅覚や味覚といった五感をフルに使って、成功した自分をイメージしていくんだ」

「どんなふうに？」

「例えばミワの夢が叶ったとき、周りの人はどんな声をかけてくれるだろう。そのときの言葉を思い浮かべれば聴覚だって刺激される。そうだ、ミワはアルコールをたしなむのかい？」

「嫌いじゃないよ」

「じゃあ、こんな風景を思い浮かべてはどうだろう。そこはミワが大好きなハワイ、きみはビーチを眺めることのできるホテルのオープン・ダイニングにいる。手にはキンキンに冷えたシャンパングラス、その中にはこの世でもっとも甘露な極上のクリスタル・ルイ・ロデレールが入っている」

「そのクリスタルなんとかってなによ」

「ロシアの皇帝、アレクサンドル二世が愛した極上のシャンパンさ。特にクリスタルはルイ・ロデレールでもブドウのできが良い年にだけつくられるという逸品だよ。なかでも熟成させたビンテージものときたら、至福の味になっている」

ハワイ・オアフ島には父が生きていたころ、一度だけ連れて行ってもらった。そのときにホテルのオープン・ダイニングで撮った写真が今もリビングに飾られていた。淡い紫のランが飾られた真っ白なテーブルクロスの上で、家族三人が写った写真だ。ハワイはいつかあらためて訪ねてみたい場所のひとつだった。

「目を閉じてごらん」

ミワはいわれるとおりにした。

「夢が叶ったお祝いにミワは、大好きな人たちとハワイにやってきた。そして祝杯をあげているんだ。真っ青な海からの風がきみの髪を揺らす。波の音が聞こえる中できみは冷たいシャンパングラスを揺らす。熟成されたルイ・ロデレールの馥郁たるフルーティーな香りが鼻孔を駆けぬける。そして乾杯、最高級のシャンパングラスは天使の鐘のような音色を奏でるだろう。そのあとでそれを口にふくむと、シトラスの香り、そして赤いベリーの香りに続いてスモーキーな深いアロマが口いっぱい広がる……」

ミワが目を開けると、ナポリタンは自分が今、それを体験しているかのように、目を細めてうっとりとした顔をしながら右手を掲げ、なんとヨダレまで垂らしている。

よほどそのシャンパンが好きなのだろう。あきれたようにミワがひとつ咳をすると、ナポリタンは我に返って言葉を続けた。

「失礼、このところルイ・ロデロールはごぶさただったものでね。とにかくだ。そんなディテールまで思い浮かべると、きみの夢は単なる夢ではなく、燃えるような願望に変わる。そうすればきっと、星がひとつ、空から降りてきて、きみの歩くべき道を照らしはじめる。

それこそが眠れる巨人からのメッセージ、そしてナビゲーションなのだ。いいかい、ミワ、それがきみの心に思い浮かんだら、迷わず、すぐに行動に移せばいい」

翌朝、ミワは高校時代から貼ってあったロック・グループのポスターをはがして、そこにコルクボードを貼り付けた。そしてそこにピンで留めた一枚の紙を読み上げた。

『私は三十歳の誕生日までにシナリオ・ライターとして多くの人々を感動させる作品を世に送り出し、その見返りとして年収を一億円にする。そのためにできることが頭に浮かべばすぐにでも行動するー』

ナポリタンのいうとおり、目標を書いた紙を用意したのだ。さらにコルクボードには家族で行ったハワイの写真とパソコンからプリントアウトした、クリスタル・ルイ・ロデレールという舌を噛みそうな名前のシャンパンの写真も貼った。

ゴールは決めた。しかし、そのためになにかからはじめればよいのか、すぐに途方に暮れた。

とりあえず売れっ子のシナリオ・ライターとなって、年収が一億円になった時の自分を想像してみた。

まず頭に浮かべたのは新聞の映画評、ミワの書いたシナリオが絶賛されている記事だった。「すばらしい構成」「誰もが予想を裏切られる衝撃のラスト」といった褒め言葉が並んでいる。

そうした場面を空想していると、ワクワクして、ふわりと空に足が浮いたような高揚感を覚えている自分に気がついた。なんだかあまりこんでしまった泥沼から抜け出したような気分だった。

すると不思議なことにすぐにやるべきことが頭に浮かんだ。

「ちゃんと基礎から勉強し直そう」

これまでシナリオ関連の本は何冊か読んだことがあるが、シナリオ・スクールのような場所に通ってきちんと勉強したことはなかった。ナポリタンも「専門知識、は大切だ」と言っていた。まずは、そこからはじめようと考えたのだ。

「できることが頭に浮かべばすぐにでも行動する、こと。ナポリタンの言葉を反芻しながら、ミワはパソコンを開いてシナリオ・スクールを探した。

結構いろんなスクールがある。通信教育。毎日、学校に通って二年間で卒業できるところ。週に一度の講義で一年間、じっくりと学ぶところ。学ぶ期間も様々だ。

しかしミワは、すでにゴールを三年後に設定している。リミットがあるためのんびりともしてられない。

結局、四月から週に三回、東京赤坂五丁目で午後六時から九時まで教室を開くスクールに決めた。

ここなら昼間、バイトをしながらでも半年間で終了できる。それにこのスクールからは、新人脚本家の登竜門として有名なKTVのシナリオ・コンクール受賞者が何人も出ているらしい。何よりの決め手は尊敬する脚本家が講師を勤めていたことだった。

理想的なスケジュールのスクールにあこがれの講師がいる、そんな偶然もなにかの導きのような気がしてミワの心をときめかせた。

ただひとつ問題があった。学費だ。

四十五万円を四月の受講開始時に一括で納めなければならない。だがミワの預金残高は一万円を切っている。

母親に借りることも考えたが、そんな余裕がないことはわかっている。

「やはり、お金か……。よし、バイトを増やそう！」

次々とやるべきことが頭に浮かんでくる。計画をすこし遅らせて、まずはお金を貯めることから始めなければならない。

今度は女性のためのアルバイト情報サイトを検索する。

時給の良さだけならお水の仕事だが、ミワには苦い経験があった。

三ヶ月ほど前のことだった。ノリコに誘われてはじめた三鷹のスナックでのバイト。時給千六百円は、昼間のバイトの二倍近い。しかし男勝りな性格のミワにはノリコのような甘えた声で接客などできない。ママからは客のボトルを早く空にするため大量に酒を飲むよう秘密指令が下されていた。そんな拷問も深夜の二時には終わるはずだったが三日に一度はママともに `アフター`、につきあわされる。その時間はもちろん、時給にはカウントされないばかりか朝方、自腹でタクシー代を支払って帰るのだ。

一体、前世でどれだけ悪行を積み、このような責め苦を受けるのか。とても時給千六百円で続けられる仕事ではなかった。

とはいえ、昼間の仕事なら時給は高くても千円ちょっと、電卓をとって計算してみる。土日を除いて月に二十日働いたとして十六万円。母には家賃の半分、五万円をミワが持つことをすでに約束してある。その他、生活費やカードでのキャッシングの分割返済分を差し引けば、四十五万円の学費を貯めるには半年以上はかかるだろう。

それでは四月からの講座には間に合わなくなってしまう。

他に方法はないのだろうか、考えているうちにミワの頭に `学費ローン`、という言葉が浮かんだ。

とりあえず金融機関に立て替えてもらい、分割で支払う。それならば四月の入学にも間に合う。ネットで調べてみると、いろんなタイプがある。条件も様々だ。

「私にはどうしても学費が必要なんだから」

そうつぶやきながら、パソコンの画面をスクロールしているときに携帯の着信音が鳴った。

ファイナンシャルプランナーのセキグチからだ。この家のリースバックの手続きに関する要件だった。

関口の説明をメモしながら聞いたミワは、最後に学費ローンについてセキグチに尋ねてみた。ありがたいことにセキグチは相談に乗ってくれるという。

その週末、セキグチと待ち合わせたのは最初に出会った、渋谷・道玄坂のファミレスだった。店内は若者たちが溢れ活気づいていたが、その喧騒とは対照的に、セキグチはひとりで難しい顔をしながらノートパソコンと向き合っている。

ミワの姿を確認するとセキグチは眉間のしわを解き、軽く右手を上げた。ミワが席に着くとセキグチはカバンからいろんな資料を取り出した。

学費ローンについていろいろ調べてくれたらしくクリアファイルに様々な資料を用意してくれていた。だが、セキグチの顔はくもっていた。

「やはり文科省が認可した、いわゆる`学校、でないとなかなか難しいようですね」

半年間のシナリオ・スクールでは国の教育ローンはもちろん、民間の銀行などでもなかなか審査は通らないらしい。

ミワはナポリタンがいった言葉を思い出していた。「すぐに行動に移すこと」、そのあとに続けた「それがうまくいなくても、すぐにあらたな計画を立てること」という言葉だ。

ミワは頭を切り替えた。尊敬する脚本家のいるスクールではあったが、諦めてもうすこし安いシナリオ・スクールを選びなおすしかない。

そう考えてセキグチにお礼をいってレシートを手繰り寄せた。忙しいだろうに、わざわざ相談に乗ってくれたセキグチのためにせめて、ここのお茶代を支払おうとしたのだ。

レジに向かいミワはサイフを開いた。そのとき、セキグチの目が光った。

店から出るとセキグチは、すぐミワに話しかけた。

「ルリガキさん、失礼ですがサイフの中のカード、見せてもらえませんか」

「カードって？」

「サイフに中に入った、赤いカードです」

たしかにミワは赤いカードを持っている。大学生になってすぐに作ったデパートのカード、分割払いで買い物ができるのが売りのデパートだ。セキグチに促され、ミワはそのカードをサイフから取り出した。

「そのカード、いつごろから持っています？」

「学生になったばかりのころだから、十年くらい前かな」

「そのカードでキャッシングをしたことは？」

顔が赤くなるのを自分で感じた。学生時代はもちろん、契約社員として働きはじめてからは、何度もキャッシングを繰り返していたからだ。そのことを正直に告げるとセキグチの目が輝いた。

。

「なんとかなるかも」

「もうキャッシングの枠なんてないに等しいのよ」

「だからこそ、いけるかもしれないですよ」

ミワにはセキグチが何をいっているのかわからなかった。

「過払い金が発生している可能性があります」

セキグチがいうにはクレジットカードでキャッシングを長い期間、繰り返していた場合、金利を払いすぎている可能性が高いという。

これまで消費者金融業者やカード会社は法定利息として定められている`利息制限法、ではなく、もうひとつの`出資法、に基づき、法定利息より約5%~15%も余分に請求していたというのだ。しかし、数年前に最高裁の判決によって利息制限法の法定利息を超える部分は無効とされたという。そして払いすぎた利息、いわゆる「過払い金」は過去にさかのぼって返還を求められることができるというのだ。

ミワが持っているカードは金利が特に高いという。例えば五十万円のキャッシング枠で十年近くも、借りたり返したりを繰り返していた場合、五十万円の借金ゼロになるばかりか、お金が返

ってくるケースが多い。過払い金が戻ってくれば学費の足しにできるかもしれない、そうセキグチはいうのだ。

「早速、知り合いの司法書士に連絡を取ってみます」

セキグチは、そう言って店を出て行った。

今も毎月、分割で支払っている借金が帳消しになるばかりか、現金が返ってくるなんて……、ミワは狐につままれたような気分になっていた。

「なるほどなるほど、そんな手があるんだね」

「過払い金請求って電車の広告なんかで見たことはあったけど、消費者金融にお金を借りている人を対象としているものでデパートのカードにもあてはなるなんて知らなかった。それに過払い金請求なんて面倒な印象があったんだけど、あっさりと返還が認められたって」

「過払い金とやらはいくらになるんだね」

「司法書士の先生に支払う手数料を差し引いて、四十五万円、シナリオ・スクールの学費とまったく同じ額、司法書士さんによれば一か月後には振り込まれるんだって。こんな偶然、信じられる？」

ナポリタンは深くうなずいた。

「成功の過程にそういう偶然が起きることを私は、多くの成功者たちから聞いて知っているよ。ミワが目指すドラマの脚本家ならば、ご都合主義だと批判されるくらいの偶然をね。

成功者の多くが、それぞれ成功の過程で同じような体験をしている。例えば、ちょうどいいタイミングで、協力者になってくれる人と出会った。どうしても知りたい情報を、偶然、買ったブックストアでいきなりみつけた。

目標に向かっているそれらの人々は、それにふさわしい人やチャンスや情報を自然と引き寄せることになるんだ」

「ちょっと、オカルトめいてきたわね」

「そんなことはないさ。目標に向かう意識が明確であればあるほど五感は研ぎ澄まされる。そうすれば、普段気づかないことにも気づく、アンテナが張り巡らされている人には、受信できるチャンネルや電波も多い、それだけのことだよ。脳はふしぎな力を秘めているんだ。それを『脳力』と呼んでもいい」

「科学的じゃないよ」

「そうかい？ ではミワに聞こう。きみの暮らす二十一世紀で科学はどこまで脳の働きについて解明できているだろう。 ぼくのいる二十世紀では、今でも脳の中央制御装置や脳細胞を互いに連結している無数の神経細胞や、その無数の組み合わせなどについてはわからないことだらけだ」

ミワは、この前、テレビで「宇宙や深海と同様に、科学は今も人間の脳の秘密を解き明かせてはいない」という番組を放送していたことを思い出した。

ナポリタンはシカゴ大学のヘリックという教授に聞いたという話を続けた。今、ナポリタンは成功者だけでなく、脳科学者や心理学者たちにも取材を進めている最中だという。

「人間の脳皮質には百億個から、百四十億個の神経細胞があり、それらは規則正しく配列されているという。それほどの複雑な仕組みを持った組織が単に肉体の成長と維持の目的のためだけに存在するとはぼくにはちょっと考えられない。

もしかしたら脳は、他人の潜在意識ともつながっているのではないだろうか。だからこそちょうどいいタイミングで協力者になってくれる人と出会ったりもする。ユングも同じようなことをいっている」

「ユングって心理学者の？」

「そう、彼は『すべての人の意識は、その奥底でつながっている』といった。つまり私たち個人の意識の奥底には個人の潜在意識があってそれらは繋がっている、だから交信も可能なんだってね」

「テレパシー、まるで超能力者ね」

「そのテレパシーだ。信じられない？」

「すぐにはね」

ナポリタンは大きな声で笑った。

「何がおかしいの？」

「だってぼくは今まさに、潜在意識を使ってミワとそのテレパシーで会話しているんだよ」
そこまでいうと、ナポリタンは身を乗り出して、ミワの手を取った。

「さらにユングは、潜在意識はその奥底で、私達、人類共有の共通意識、無限の知性、にもつながっているということを発見した。ミワ、きみはその無限の知性を使うことで成功できるんだ」

赤坂にあるテレビ局の敷地内に植えられた桜が満開の花を咲かせている。桜の下ではノラ猫が気持ちよさそうに昼寝をしていた。淡くうららかな桜の花の香りは眠気を誘うほど心をリラックスさせてくれる。

ミワには今年の桜が特に輝いているように見えた。

ナポリタンのいうように、毎朝、壁に張った目標を読み上げ、すでに成功した様子を想像しているうちに、ミワは自分の内面にある変化が起きていることを自覚していた。日に日に、気持ちが前向きになっていったのだ。

汚れたコップの水に一滴一滴、キレイな水滴が落ちて、だんだんとコップの中が澄み切っていくような感覚だった。桜がいつもの年よりもきれいに映ったのも、そのせいかもしれない。

いよいよ夢の第一歩、シナリオ・スクールの講座が始まる四月がやってきていた。きょうはその最初の講義の日だ。横浜郊外から電車を乗り継いでミワは赤坂までやってきた。授業が始まる三〇分も前に到着したので一人で花見を楽しんでいるのだ。時計を見た、講義開始時間の十分前だった。ミワはベンチから腰を上げた。

シナリオ・スクールのある雑居ビルの場所はすでに確認してある。桜を植えたテレビ局の広場のすぐ裏側だ。

そこまで歩いてレンガ色の細長いビルの前に立った。築年数の古い雰囲気だ。このビルが建てられた当時から、シナリオ・スクールはここで開かれてきたらしい。

大きく深呼吸してからミワは細い階段を登って二階にある教室の前に立った。ドアノブに手を伸ばした時、自分の手が汗ばんでいることに気がついた。知らないうちに緊張していたらしい。

緊張をほぐすため、笑顔を作ってドアノブを回して教室に足を踏み入れた。そこには二十代前半から四十代後半まで、様々な年代のシナリオ・ライター志望者が二十数人、すでに席についていた。数人がミワの方を見たが、すぐに視線を落とした。教室全体にぴりぴりとした緊張が漂っている。

教壇のすぐ手前、一番前の席が空いていたので迷わずそこに腰を下ろした。以前なら、こういう集まりでミワは常に目立たないように、後ろの方の席を選んでいて、そうした積極性も変化のひとつだった。

午後六時ちょうどに優しい笑顔で教壇に立ったのは、白髪交じりのボブヘアが似合う五十代の女性講師だった。

講師は「トミナガ・エイコ」と自己紹介した。高校時代、大好きだった連続ドラマのシナリオを手がけていた脚本家だった。

最初に自己紹介が行われた。夜間の講義というだけあって、それぞれが昼間、大学なり、バイトなり、本業なりを抱えている人たちばかりだった。

自己紹介が終わると、いよいよ講座が始まった。

講師のトミナガは、古今東西の有名な映画や名作ドラマを例に挙げながら、「起承転結」といった基本から「ドラマとはストーリーではなく秩序を与えられた葛藤だ」というようなことを説明した。

本などにも書かれていることであつたが、生で解説してもらうと、それまでよくわからなかった

部分までがよく理解できた。

一言も聞き漏らさないようノートを取っているうちにあっという間に最初の二時間は終わった。残り一時間では、今の講義をもとにして、実際に八百字ほどの脚本を実際書いてみるという。

『逆転』をテーマにして起承転結のあるストーリーにする、というものだ。

「最初だからシナリオ`のようなもの、で構わない」そういいながら講師のトミナガが受講生に原稿用紙を配る。

何を書こうか、考えはじめたミワは驚いた。早速、ペンを走らせはじめる受講生がいたからだ。

原稿用紙にペンを滑らせる音は時間とともに二人、三人、四人と増えていく。ミワの脇の下に冷たい汗が流れた。

なんとか原稿用紙のマス目を埋めなければならない。しかし、焦れば焦るほど、ストーリー作りに集中できなくなる。壁に買った時計の針が三倍速のスピードで回っているかのように思えた。

「そこまで。きょうの講義はこれで終わりです。できた人は提出して、帰っていただいて結構です。まだできていない人には、もうすこし、猶予を与えましょうね」

講師のトミナガが、そう告げた時も、ミワの原稿用紙には一文字も書かれていなかった。

次々に原稿用紙を提出して、教室を出ていく受講生たち。彼らにとっては、こんなの朝飯前ということなのか。

時間内に提出できなかったのは、ミワを含めて三人だけだったが、ミワ以外のふたりは、それから数分もしないうちに原稿用紙を提出して部屋を出ていった。ひとりはまだ何も書かれていないミワの原稿用紙に視線を注いだあと鼻を小さく鳴らして笑った。

寒々とした教室にひとりで取り残された。場違いなところに来てしまったようで、切なさや情けなさが胸にこみあげてきていた。そんなミワに講師のトミナガは優しい口調で声をかけた。

「まだまだ書けなくて当たり前ですよ。最初から完璧に書けるのなら、こんなスクールいらぬもの」

スクールの入った雑居ビルから赤坂の街に出た。春とはいえまだ夜風は冷たい。その冷たい風に散る桜の花びらがいつにも増して切なく思えた。

マラソンのスタートを切ったはいいが、いきなり足をくじいたような感じだった。自分のシナリオが評価され、インタビューを受けているシーンや、何百万ものギャラが振り込まれている預金通帳を想像しては浮かれていた自分が恥ずかしくなった。自分が、年収一億円の売れっ子シナリオ・ライターなどになれるわけがないではないか。心の奥底から湧き上がるように、そんな声が聞こえてきた。

赤坂から表参道を経由して渋谷の駅に着いた時には、雨が降りはじめていた。せっかく咲き誇った桜の花びらを散らす春の雨はミワの心を一層、重くした。

さらに渋谷駅では気をいっそう滅入らせる人物も現れた。

「ミーワー、やーだー！」

コウモリも驚く高い周波数の声。黄色いチャンネルのスーツに身を包んだノリコだ。

「あのマンション、出たんですって。とんだ災難だったよねえ」

ミワを訪ねて高円寺のマンションに行った時、大家のタナカに出くわしたらしく、ノリコはハルヨシがすべての荷物を持ち出したこと、ミワがマンションを出たことなどを知っていた。

「ミワったら、ほんとうについてない。きっと、そういう星の下に生まれているのねえ。だから、素直に私のビジネスを手伝えばいいのよ。そうすれば、運命は変わるよ、そんな目に遭わなくても済むのよ」

上から目線でそういったノリコは、ミワのトートバックを覗き込み、そこに入ったシナリオ・スクールの教材に目を止めた。

「なあに、これ。……やだ、ミワったら性懲りもなく、まだこんな勉強やってんのお。才能がないからシナリオ・ライターなんて無理だって、自分でいったじゃない。あなたねえ、私たち、もう三十近いのよ、叶いっこない夢を追いかけてる歳じゃないでしょうにい」

昨日までなら、そういうノリコに反発したかもしれない。しかし今のミワにはノリコの言葉が、極めて常識的なオトナの意見のように思っていた。

「だから私の仕事を手伝いなさいってば。そうすれば、月に百万円くらい稼がせてあげるから。簡単なことよ、あなたと同じお金に困っている人を誘えばいいだけなんだから。今のご時世、そんな人、掃いて捨てるほどいるんだからね。見てみなさいよ」

ノリコは渋谷駅南口のバスターミナルの前を歩き交う群衆を指差した。

「みんな忙しそうだね。目の前の仕事に一生懸命にとりくんでいるように見えるよね。忙しく働いて十分な給料をもらっているように見えるよね。

でもね、あの中の子にひとりはハケンで、バカみたいな安い給料でコマネズミのように働かされているの。

運良く正社員になった人だって、その会社がブラックだったらもっと悲惨だよ。すぐに名ばかりの管理職にされて残業代もボーナスもなくなる。そして早朝から深夜までこき使われて過労死寸前に追い込まれる。

誰だってそんな生活から抜け出したいと心から思っているの、だからすぐに興味を持ってくれるよ」

「でもそんなビジネス、いつまでもつづきっこないじゃない。だってねずみ講みたいなものでしょう」

ノリコはいかにもあきれた、という顔をして首をすくめてみせた。

「あのねえ、ウチのやりかたは違法でもないし、商品にも限界はないよ。チベットにあんなすばらしい植物があるなんてまだまだ知られてないでしょう。そりゃあ最初は誰だって断られるよ。でもそれが当たり前なの。

たしかに最初でめげちゃう人もいっぱいいるよ。でもそんな人は入会金をドブに捨ててしまうだけ。そうして捨てたお金だって私たちのフトコロに入ってくる、それだけの話よ」

「私のようなピンボー一人からお金を巻き上げてるだけじゃない」

「ミワ、あそこをみてごらん」

ノリコは交差点の向こう側に立っている若い男を指差した。すすけたジャンパーを着て、雑誌のようなものを掲げている。

「ホームレスの人よ。あの雑誌の出版元が彼らを社会復帰させるために、ああやって本を売る仕事を与えているわけ。あれは私の数年後の姿だ。私はそう思って今の仕事でお金を稼ごうと決めた。お金がない。こんなみじめなことないもの。でもちゃんと稼げるまとも仕事なんて、一度レールを外れたわたしたちにはまわってこない。

女なら水商売や風俗に行くか、心を病むかのふたつにひとつ。水商売だって歳をとればできなくなるわ。そこそこ稼ぐ男をつかまえられるればいいけど、いまどき稼いでくれる男自体がない。私たちはそういう時代に生まれた。そういう時代に社会に放りこまれた。そんな中でサバイバルするにはどんなことしたってお金を稼ぐしかないじゃない。何をしたってお金を集めた人が勝ちなのよ」

ノリコは下卑た薄笑いを浮かべてミワをにらんでいる。

「お金がすべてなわけ？」

ミワは思わず反論した。するとノリコは眉根を寄せて神妙な顔を作りながら口を開いた。

「ミワ、あなたの悩みや心配ごと、その何割が、どんなことで占められているわけなの。胸に手を当てて考えてみてよ、どう？ ほとんどがお金のことじゃない？」

ハッとした。いわれてみればたしかにそうだ。リースバックされた家の家賃、毎月の携帯代、日々食事をするためのお金。洋服代や化粧品代だってなければ人並みに恋をすることだってできない。お金があれば今抱えているほとんどの問題が解決するのも確かだった。

ミワの心を見透かしたように得意げな薄笑いを浮かべながらノリコはミワのトートバッグの中を再びのぞきこんだ。

「シナリオ・ライターねえ。そのスクールには何人くらいの受講生さんが通っているわけ？ それでその中の何人がプロになれるわけ？ プロになれた人たちだって、ちゃんとその仕事で食べていけるのかしら。作家や脚本家の世界ってすごいピラミッド社会でお金を儲ける人って、ごく一部だって、よく聞くけど」

時間内に一文字も書くことができず、ついさっきまで、ひとり教室に取り残されていた光景が頭の中に浮かんだ。体の中からも落ちていくような感じがした。ノリコのいうとおりだった。あの教室にいる人たちの中で何人がデビューできて、何人がいわゆる売れっ子となれるのだろうか。それさえもわからない。それなのに自分はその二十数人の中でも、一番の落ちこぼれなのだ。

「夢ねえ。そういえば高校時代に好きだった俳優が戦隊ヒーローもののドラマで、こんなこといってたっけ。`夢っていうのは呪いと同じ。呪いを解くには、夢を叶えるしかない。だけど、途中で夢に挫折した者は、一生、呪われたままだ、ってね」

「なるほどなるほど、いろんなことがあってすっかり落ち込んだわけだ」

ナポリタンは陽だまりのような笑みを浮かべている。

「夢は呪いだって、ほんとうにそうかもしれない」

おびえたようにミワがいった。

「おもしろいことをいうね。ふむ、たしかに夢と呪いはよく似ているかもしれない」

ナポリタンはあごに手を当ててうなずいている。

「やっぱり、そうなの？」

「しかし、似て非なるもの、というか対極にあるものだ。例えばコインの裏と表のようなものだろう。コインが表を向いているあいだは決して裏側は見えない。裏返せば、今度は表側が見えないようにね」

「でも夢に挫折すれば一生呪われるって、わかる気もする」

ミワが独り言のようにそうつぶやくとナポリタンはやれやれというような表情をした。

「ミス・ノリコは`夢、と`明確な目標、を混同しているようだね。期限や金額を決めた夢はすでに`いつかなれたらいいな、という漠然とした夢ではなく、すでにその時点で明確な目標となっている。さらに、それが実現したときのことを思い描くことで信念に裏打ちされた`燃えるような願望、になる。そうなれば、それはかならず現実のものとなるんだ。もしかすると当初、描いていたゴールとは異なることもあるけどね。そうだ、いい機会だからミワに成功の定義を教えてください。ミワは成功とはどういうものだと思う？」

「目標を達成すること。お金持ちになったり、立派な地位を築いたり、多くの人に尊敬される人になるっていうのも成功といえるかな」

「なるほどなるほど、でもね、実のところ成功とは結果だけをさすのではないんだよ。ほんとうの`成功とは自ら価値があると認めた願望をひとつひとつ表現していく過程、つまり、プロセスの中にこそあるんだ」

「じゃあ、結果がともなわなくていいわけ？」

「ライト兄弟がノースカロライナのキティホークで初めて飛んだのはわずか二百六十メートル、五十九秒間のことだった。大空を自由に飛びたいと考えていたのに、それだけしか飛べなかった彼らは失敗者だろうか。英国領インドの完全なる独立を目指したガンジーだったが、一部はパキスタンとして分離してしまった。ガンジーは失敗者だったのだろうか。ミワが三十歳までにライターとして年収一億円を目指した、しかし年収が五千万円に終わってしまったらミワは失敗者なのだろうか。ミワは一億円を達成するまで生涯、呪われたままなのだろうか」

さすがにそうは思わない。なんたって今の年収はゼロなのだから、もし年収五千万までいったとしたら大きな飛躍、いや大成功だ。それに五千万も稼ぐようなシナリオ・ライターはそれなりに人を楽しませる多くの作品を世に送りだしているはずだ。そう考えてミワは首を振った。

「そうだろう。いずれにしても、最初から諦めて何も行動を起こさなかった人は、プロセスの途中にすらたどり着けないんだよ。まずは第一歩を踏み出す。そこからすべては始まるんだ」

「ナポリタンが話を聞いた人達もそうだったの？」

「そのとおりだ。さらにゴールにたどり着いた彼らの多くがこんなことをいっている。ある目標

があって、そこへ向かって一生懸命努力しているときが一番、幸せだった。むしろ目標に到達してしまうと、もう心がときめかない。だから目標を達成したらすぐに次の目標を立てるんだってね。きみはすでに夢に向かって走り出した。すでにミワのサクセスストーリーははじまっているんだよ」

「そんなこといっても無理なものは無理よ。身の程知らずもいいところだった。そもそも私には才能がないのよ」

ミワは教室にひとりぼつんと残ったときのみじめな気持ちを思い出していた。

「どうやらまた頭の中にクモの巣がはりめぐらされてしまったようだね。無理もない、人間はネガティブで破壊的な思考のほうにどうしても傾きやすいからね。だけどミワ、それはとても危険なことなのだ」

「自分を客観的に理解することの何が危険なのよ」

「潜在意識は建設的な思考と破壊的な思考を区別することができないからさ。多くの人が、夢を持ちながらも、ちょっとした挫折で、自分には才能がない、自分は貧乏になるのが宿命なのだ、と諦めてしまう。こうした人々は潜在意識に無意識のうちに否定的な思考を与えることによって、自ら不幸を作り出してしまっているんだ」

「そうかしら」

「気をつけて欲しい、前にもいったが潜在意識は、それが嘘であろうと、真実であろうと受け入れてしまう。繰り返し、繰り返し、反復され、潜在意識に浸透した思考は、必ず現実のものになる。

だからこそ、否定的で破壊的な思考を潜在意識にいれないように気をつけて、なりたい自分の姿を潜在意識に送るようにする必要があるんだ。

そのために目標を紙に書き、毎日、読み上げること。そして願望が既に達成された時の姿を潜在意識に教え込むことが大事なんだよ」

「私に才能がないのは事実よ、きょう、あらためてわかった」

「思考は現実化する、ぼくはそうだったよね。もし才能がないと考えれば、きみの才能が開花することは決してない。しかし私には才能がある、そう考えれば才能は開花する。それだけのことさ」

「だから、現実を生きていれば、自分に才能があるなんてそんなこと考えるだけでも、おこがましいの！」

苛立った口調で、ミワはナポリタンにあたった。

そんなことをしてもしょうがないことだと、すぐに後悔した。それでもナポリタンは、笑みをたたえながらミワを見つめている。

「ほんとうのことを言おう。きみに才能があるかどうかなんて、実のところ、それほど、たいした問題じゃないんだ。無限の知性の力を借りれば誰だって天才になれるんだからね」

「あなたがこの前から知っている、無限の知性って、一体なんなのよ」

「無限の知性、それは潜在意識の中でも格別な働きをするものさ。第六感、勘、インスピレーションとも呼ばれている、心の特別な働きの源泉となるものだよ。

それを「神」と呼ぶ人もいるし、「宇宙の真理」と呼ぶ人もいる。ある人は、森に落ちた小さなどんぐりをカシの大木にさせてしまう「自然の摂理」と呼んでいる。ぼくはそれを「無限の知性」と名付けた。呼び方なんてどうだっていい。それとリンクできる人物、それがこの世の中で「天才」と呼ばれている人物なんだ。天才は、みんな、無限の知性からヒラメキを得て、潜在能力を開花させて天才と呼ばれるようになったんだよ。この場合の潜在能力は脳のパワーを使うわけだから「潜在脳力」といってもいい」

ミワは小学校の教室の額縁に飾られていた、発明王の有名な言葉を引き合いに出して反論を試みた。

「でも、エジソンは「天才とは一%のひらめきと九十九%の努力、だ」といったわ」

ミワは頑固な父親に反抗してみるようにそういった。ミワの反論にナポリタンは、うれしそうに「なるほど、なるほど」といったあとで、持論を続けた。

「エジソンがぼくに語ってくれたのは「Genius is one percent inspiration and 99 percent perspiration」という言葉だった。それを聞いて僕が理解したのは「わずかに、一%のひらめきがあれば、九十九パーセントの無駄な努力をしなくてもいいのだ」ということだった。そしてエジソンは一%のひらめきこそ、自然からのメッセージだとぼくに語ってくれたんだ。エジソンが「自然」と表現したもの、それこそが他にもない「無限の知性、だよ」

ミワが目指す映画の世界だけじゃない、音楽や小説、そして絵画に演劇にダンスーそれらには時空を超えて、人々の心を揺さぶる力がある。そんなふうになんか感動させる芸術を生み出す力の源泉も、無限の知性にあるのだとナポリタンはいう。

ミワは顎に指を置いて考え込んでから口を開いた。

「無限の知性の力を借りれば、私にもいいシナリオが書けるの？」

「無限の知性から、ひらめきを得たシナリオは、おそらく世界中の人を共感させる力を持っているはずだ。しかし、そこまでの超大作でなくても、いいシナリオを描くことは十分、可能だろう」

「どういうこと？」

「改良的想像力を使うのさ。いいかい、人間の想像力には二つの種類があるんだ。ひとつが「独創的想像力」。これを使いこなせれば無限の知性と直接コンタクトして、ミワはアイデアや難問の答えを得ることができる」

「もうひとつが「改良的想像力、ってやつ？」

「そう、これは古くからある考え方や知識、アイデアなどを組み合わせたり、すこしなにかをプラスしてあたらしいなにかを生み出す力だ。

よほど特殊な場合でなければ独創的想像力の天才にたよる必要はあまりない。これまでだってほとんどの発明家や芸術家たちは、この改良的想像力だけで、多くの難問を解決し、新たな作品を生み出してきたのだからね。

そうだ、きみの好きなフランク・キャプラ、彼も「改良的想像力、であの『素晴らしき哉、人生！』を創り出したじゃないか。あのストーリーはキャプラのオリジナルではない。スターンの短編から着想を得て「改良的想像力、によって書き上げたものだからね」

たしかにそうだった。『素晴らしき哉、人生！』はフィリップ・ヴァン・ドレン・スターンがクリスマス・カードと共に友人に送った短編『The Greatest Gift』が原作だった。それに目をつけて映画化したのが、当時、独立映画製作会社「リバティ・フィルムズ」を設立したばかりフランク・キャブラだった。

日本でもドラマのヒットメーカーと呼ばれる脚本家の作品の多くが古典文学の現代版だ。ハリウッドのヒット映画だって、その構成は世界各地の神話の構造に近いとなにかの本で読んだことがある。それらはすべて、改良的想像力からスタートして生み出されたものだったのだ。

そうだった。誰も見たこともないようなオリジナリティのある物語を書こう、そう、気負い過ぎていて、一行も書けなくなってしまっていたのだ。

まずは赤ん坊が言葉を覚えるように、古くからある物語や構造を真似ていけばいい。改良的想像力の力を借りればよいのだ。そう考えると、ミワの心は一気に軽くなった。

そのとき、ナポリタンの言葉に、ある重大な矛盾があることに気がついた。

「ちょっと待って。ナポリタンのいるワシントンは今、何年だっけ？」

「年が明けて一九一四年になったばかりだよ」

「キャブラの『素晴らしき哉、人生！』が公開されたのは、一九四六年だよ。どうしてキャブラを知っているわけ？」

ナポリタンは、ミワの問いに、きょとんとした表情を浮かべ、うろたえるでもなく平然と答えた。

「だってぼくの前は、きみの言葉なんだよ、当然だろう？」

『私は三十歳の誕生日までにシナリオ・ライターとして多くの人々を感動させる作品を世に送り出し、見返りとして年収を一億円にする。そのためにできることが頭に浮かべばすぐにでも行動するー』

ミワはこの言葉を毎朝、読み上げるだけでなくメモしてサイフに忍ばせ、外出時の電車を待つ時間、バイトの休憩時間など、暇なときに見つめていた。

このころには自分が夢を叶えた時の光景を思い浮かべるのが習慣のようになっていた。特に夢を叶えたあと、ハワイのコテージで大好きな人たちとシャンパングラスを傾けている光景を思い浮かべるとミワは心からリラックスした。クリスタル・ルイ・ロデレーンという舌を噛みそうな名前のシャンパンの味は、正確には想像できなかったが多分、友人の結婚式の乾杯の時にでるシャンパンの、もっともっとおいしいものだろう。

不思議なことに、そうしたことを繰り返しているうちに、優柔不断で怠けグセもあったミワの性格に、変化が現れきていた。

何をするにしても素早く決断する習慣が身に付いたのだ。

無理もない、ミワの夢には「三十歳の誕生日まで」というタイムリミットが設けられている。だから迷った時も自然とどっちがゴールにより近い道なのかが、すぐに判断できるようになったのだ。

そのせいで「明日やればいいのか」という「一日延ばし」のクセもなくなった。昨日の夜、夢に現れたナポリタンも、「一日延ばし、つまり決断力の欠如は、失敗者になる最大の原因だ」というていた。

以前なら「明日できることをきょうやるなということわざもある」、売り言葉に買い言葉のような反論もしていたところだったが今は、ナポリタンのいうことを素直に受け入れることができた。

「一あの、ルリガキさん」

背後から声をかけられたのはシナリオ・スクールが入る雑居ビルを出て、乃木坂通りを歩きだしたときだった。

振り返ると、大きな瞳を輝かせた二十代前半の女性が立っていた。

一回目の講座の冒頭で行われた自己紹介でも、キラキラとしたオーラを放つようなビジュアルでひととき目立っていた美しい女の子だ。

オードリー・ヘプバーンをオリエンタルなイメージにしたようなエキゾチックな顔立ちながら、あどけなさの残る色白の美女。自己紹介で「女優を目指している」といって、誰もが納得した。確かシノダと名乗っていたはずだった。

「シノダさん？」

「名前、憶えていてくれたんですか？　うれしい！」

「それで？」

「ルリガキさんと話してみたくって一すみませんが、すこしだけ、お時間ありませんか？」

「終電に間に合えばいいよ、とはいっても、神奈川の田舎から通っているから、一時間半ほどし

かないけど。あそこでいい？」

ミワは道路の反対側にあったオープンカフェを指差した。ユウカは女から見ても魅力的な笑顔でうなずいた。

「シノダ・ユウカ、二十一歳です」

改めて名乗ったあとでユウカはオーダーしたアイスラテのストローに口をつけた。女優志望というだけあってそんなさりげない仕草もドラマのワンシーンのように見えた。

ユウカは二十一歳、女優になる為の勉強の一環としてシナリオの勉強をはじめることにしたという。

ユウカは女優になるために、他にもボイストレーニングで声を、フィットネスジムで体を鍛えているだけでなく、英会話も学んでいる、と話した。

これだけの美貌ならば、存在感だけでスターにもなれそうなのにえらい、ミワは素直にそう思った。

「どうして、そんなに頑張るの？」

「母親と約束したんです、女優を目指すならば二十四歳の誕生日までにテレビか映画の主演をすること。実現しないならば、きっぱりと女優の夢をあきらめるって」

ここにも明確な夢に、期限を決めて、向かっている女性がいた。ミワは同志に出会ったよううれしくなった。

だが、同時に複雑な気持ちも抱いた。ただでさえ素材の良いユウカがすでに夢に向かって様々な努力をしている。一方、自分はまだ夢にむかって第一歩を踏み出したばかりだ。

「どんな女優になりたいの？」

そう聞くと、ユウカは一瞬、戸惑ったような表情を見せたあとで、吸い込まれそうな黒い大きな瞳をミワに向けて、きっぱりといった。

「オスカー—アカデミーの主演女優賞を獲れるような女優になりたいんです！」

ユウカは自らの声の大きさに気づいて、気まずそうに辺りを見渡しあとで細く長い指が揃った両手で口を隠した。そんな一挙手一投足がユウカはいちいち画になった。

ユウカは十七歳の時に映画館で見た『ブラック・スワン』に主演したナタリー・ポートマンに強い衝撃を受けた。そしてナタリー・ポートマンがオスカーの主演女優賞にノミネートされると父親に頼みこみ、第八十三回のアカデミー賞授賞式にも行ったという。

ユウカの目の前でレッドカーペットを歩いたナタリー・ポートマンは見事、主演女優賞に輝いた。そのときのポートマンの笑顔はスクリーンで見せる、どんな笑顔よりも輝いていたという。

以来、いつか自分もあの舞台に立ちたい、ユウカはそう考えた。英会話を習っているのもそのためだという。

そこまで一気にまくし立てると、ユウカは我に返ったような顔をしてこういった。

「ごめんなさい。こんなことほかの人に話したの、初めて」

ユウカは恥ずかしそうに両手で頬をおおった。

きっとお金持ちのお嬢さんなのだろう、来ている洋服もいかにも上質なように見える。さきほどからユウカが動くたびに微かなコロンの香りが漂った。甘くフルーティーな香り、もしかしたらハワイで飲むシャンパンは、こんなエレガントな香りなのではないか。

一方のミワはコロンドころか、化粧もせず、着古したジーンズに量販店で買ったアウターを羽織っているだけだ。

釣り合いが取れていないような気がして、思わずユウカに聞いた。

「どうして私に声をかけてくれたの？」

その問いにユウカはちょっと困ったような顔をして答えた。

「なぜだろう？ 教室にルリガキさんが入ってきたときに感じるものがあったからかな」

「どんな感じよ」

笑いながらミワは聞いた。

「この人は、すごい、シナリオ・ライターになる、そんな予感かな」

ユウカは真っ白な歯をのぞかせながら照れたように笑った。その笑顔は映画『ローマの休日』で無邪気に微笑む、王女役のオードリー・ヘプバーンを連想させた。

「なるほどなるほど」

ナポリタンはいつにも増して上機嫌な様子で笑っている。

「きっとミワからオーラが出ていたんだね。エジソンの共同経営者となったバーンズもそうだった。なにしろ彼がエジソンの前に現れた時は浮浪者同然の身なりだったんだから。

しかしエジソンはなにかを感じた。人は心に何を決意しているときに、それがまだ準備段階であるうちから、すでにそのことが容姿に現れることがあるんだ。ミワもそうだったんだろう、それをミス・ユウカは感じたんだ」

ナポリタンの常識外れの話にも、このころのミワはさほど驚かなくなっていた。

「ミス・ユウカとの出会いを大切にすることだ。エジソンとバーンズが出会ったように、成功に向かう途中で人は、同じように燃えるような願望を持った人に出会う。共振する魂が互いを引き寄せるんだ。きっとユウカはミワにとっての良き協力者になるはずだ」

「互いに励ましあったりできるもんね」

「それだけじゃない。きみたちはきっと第三の心— `マスターマインド、を手に入れることができるはずだ」

「マスタードンマイ？」

「落ち込んだマスターを励ましてどうするんだね。そうじゃなくてマスターマインドだ。

マスターマインドとは、二人以上の願望や目標を持った人々の間で行き交う、波長の合った思考のバイブレーションのことだ。二つの心がひとつにまとまるとき、心の化学反応が起きて見ることも触ることもできないもうひとつの心、第三の心が生まれる。

それこそがミワの中で目覚めはじめている眠れる巨人、潜在意識の奥底にある無限の知性の扉を開くための近道でもあるんだ」

無限の知性。それは潜在意識の奥底にある。あらゆる天才発明家や芸術家、偉大な指導者たちが常に頼りにしていたもの。潜在意識の中でも格別な働きをするもの。第六感、勘、インスピレーションと呼ばれている心の特別な働きの源泉となるものだとナポリタンは言っていた。無限の知性にアクセスできればシナリオという手段で世界中の人を感動させることもできるという。

「マスターマインドを使わないと、無限の知性にはたどり着かないわけ？」

「ひとりでも到達することはできる、しかし、マスターマインドを使えば、もっと簡単だということだ。

ぼくがそのことに気づいたのは、顧客の問題を仲間たち三人で、どう解決するべきか、話し合っている時だった。ぼくたちは、テーブルに座って、まず問題の本質について確認し合った。そして、どんな思いつきでも構わないから、どんどん意見を述べあったんだ。

しばらくそうしているうちに不思議なことが起こった。それぞれの心が刺激されることによって、三人の誰も体験したことのないような、ある画期的なアイデアが心にひらめいた。それも三人同時にね！ そのアイデアは目に見えない知識の源泉、あの無限の知性からのプレゼントだったんだよ。こうしてぼくは無限の知性と出会った。するともっと、不思議なことがおきたんだ」

ナポリタンは、そのいきさつを興奮気味に語りだした。

「ぼくはその夜、原稿を書いていたのだが、行き詰まってしまった。こんな日は、とっとと眠る

に限る。そう思ってベッドにもぐりこんだ。そのとき、ちょっとした思いつきで、先人たちの知恵が借りられないかと考えたんだ。

そこでぼくは、尊敬する偉人たちを何人か選び、彼らならどうするか、聞いてみようと考えた。いわば空想の会議だね、そこでエジソン、ダーウィン、リンカーン、ナポレオン、バーバンク、そしてカーネギーたちを呼び寄せたんだ。

当初は、ぼくが議長になって彼らにいろいろと質問をした。例えば、ナポレオン・ボナパルトを指名して、きみならこの問題にどう対処するんだい？ といった具合にね」

「答えてくれたわけ？」

「もちろんさ、彼らのことは研究済みだから、彼らがあるシチュエーションに置かれたとき、どう対応するか、ぼくには想像できるからね。ところが、そんなことを続けていたら、ある日、驚くべきことが起きたんだ。ぼくの想像上の人物でしかない彼らが、正真正銘 `現実の姿、で、ぼくの目の前に現れたんだよ」

「だから、それもナポリタンの空想だって」

「たしかにそうだろう。でもね、そのうちに彼らは、私自身が知る由もない、彼ら自身の体験を交えて、勝手に会議をするようになったんだ。

彼らの言葉の中には、ぼくがどれだけ頭をひねっても考えつかないような、すばらしいアイデアが、ちりばめられていた。彼らは、もちろん、ぼくの想像上の人物に過ぎない。しかし、ぼくが想像した人物が、どうしてぼくの想像を超えるアイデアをもたらすことができたんだろうね？」

「それが `無限の知性、の力だといいたいわけ」

「いい子だね。きみはミス・ユウカたちとマスターマインドを築くことで、無限の知性に近づける。そして、その扉を開けば、ひとりでもコンタクトできるようになる。そうなればミワは世間から `天才、と呼ばれるようになるだろう」

「あなたを信じてやってみるわ」

ナポリタンは満足そうに目を細めた。その笑顔にはどこか見覚えがあるような気がしたがミワには思い出せなかった。

三時間の講義を終えてミワは、ユウカ、そしてムラカミ・カナコといっしょに、赤坂のファミリー・レストランでお茶を飲みながら、語り合っていた。

ドリンクバーを利用すれば安い料金で、長時間、利用しても文句はいわれぬ、そのため最近、講座が終わるたびに、ここにきて話し合うのが恒例になっていた。

おもな話題は、レンタルビデオ店で借りた映画の感想だ。三人は毎回、別れ際に交代で、それぞれが見てみたい作品のタイトルをいって、次に会ったとき、感想を自由に語り合うことにしているのだ。

カナコは前回から仲間に加わった。ミワと同じ二十七歳、黒い髪をショートボブにして、黒ブチのメガネをかけた、いかにも理知的なビジュアルが印象的な女性だ。

カナコは神田・神保町の小さな編集プロダクションに契約社員として勤めているという。地方の国立大学の歴史学科を卒業したあとに上京、編集のアルバイトをしながらシナリオ・ライターを目指している、と自己紹介した。

カナコは特に、第一次世界大戦から第二次世界大戦前後の、激動の世界史に興味があり、いつか、そのとき代の躍動感を描いてみたいという。カナコの歴史についての博識には、ミワもユウカも驚かされるが多かった。

この日の議題となった映画は前回、カナコが課題映画にあげた、マイケル・ベイ監督の真珠湾攻撃をテーマにした恋愛映画だった。

「私ならこう演じる」ユウカがケイト・ベッキンセイルの演技についてそういえば「私ならこう展開する」とミワがストーリーの構成について意見をいう。それに対してカナコが「私ならこんな時代背景とリンクさせて、二人の恋をもっと盛り上げる」といった具合だ。

三人の自由な議論からは、いろんなひらめきやアイデアが生まれた。この日、三人の心にひらめいたアイデアも、マイケル・ベイが採用していたら映画が十倍は面白くなっていただろう。

ミワはこの話し合いで生まれたアイデアをすべてメモした。そこから生まれたアイデアは、毎回、講義の最後に出される宿題をこなすのに大いに役立った。

「絶望」「犠牲」「誤解」など、決められたテーマに従って十分ほどの物語を作る宿題だったが、ユウカやカナコとの会話で思い浮かぶアイデアを活かせば、おもしろいように筆が進んだのだ。

二人と出会う前は思いつきを文字に起こそうとしても、途中、どうしてもなくつまらない作品を書いているような気がして書くのをやめてしまっていた。それが嘘のようだった。

これがマスターマインドの力なのか、それともナポリタンのいう改良的想像力が活性化しているのか、ミワにはわからなかった。ただただ、毎日、書くことが楽しくて仕方がなかったのだ。

一通り、映画の感想を語り合ったあとで、カナコが口を開いた。

「そういえば、誰が選ばれるんだろうね？」

「何が？」ミワが聞いた。

「KTVのシナリオ・コンクールに推薦してもらえる人よ。毎年、卒業生の中から、ひとりだけ、選ばれるってやつ」

「そうなの？ 知らなかった」

「やだ、ミワさん、ちゃんと入学時にもらった紙に書いてあったでしょう」

ユウカが笑いながらいった。

KTVのシナリオ・コンクールは、三大メジャーのひとつ、幾多の一流脚本家を輩出した新人シナリオ・ライターの登竜門だ。

最優秀賞になれば、作品が一流俳優たちによって演じられ、地上波で放送されるだけではない。翌年、春からの連続ドラマの執筆にも参加できる。

誰もが応募できる賞ではあるが、スクールの推薦があれば、いきなり最終選考に進めるだけでなく、選考にも大きなアドバンテージとなるらしい。

推薦作品に選ばれ、受賞するためだけに、一度は卒業しても、再び入学してくる受講生までいるという。講座の初日から課題をスラスラと書いていたのは、そうした受講生たちだったのだ。

ミワだって、卒業作品を書くことくらいは知っていた。しかし、それがコンクールに直結し、シナリオ・ライターとしての未来を切り開く重要なものだとは知らなかった。早呑込みのおっちょこちょい、母親からいつも注意されていることだった。

「どうやって選ぶの？」ミワが聞いた。

「提出された卒業作品を、先生たちで審査するんだよ。ただし、推薦作に選ばれてからが大変みたい。学校としても、ヘンな作品を推すわけにはいかないじゃない。だから、とことん、手直しさせられるって。そこで挫折してしまう人も少なくないらしい」

カナコによれば、だからこそ、このスクールの推薦作品は、普通の応募作品よりも結果的にレベルが高く、最終選考で選ばれる可能も高くなっているのだという。

「いつ提出するの？」

「半年間の講座が終わる九月のはじめ、九月末の最後の講座で選ばれた人を発表するの。まだ三ヶ月も先だけど、私はもう書きはじめていますよ」

カナコがそういうとユウカも「私も」と続いた。

ミワは口に含んだコーヒーを、喉を鳴らして飲み込んだ。二人はすでに書きはじめているというのに、自分はまだなんの準備もしていない。就活のとき、友人が次々と内定を決めていたのに自分だけ取り残されていた頃のような焦りの感情がよみがえってきた。

「こうしちゃいられない！ 私も帰って書きはじめる！」

そう叫んでテーブルを両手で叩き、勢いよく席を立った。ミワのあまりの慌てぶりに、カナコとユウカは、顔を見合わせて、笑っていた。

二階にあるファミレスから階段を下りて、乃木坂通りに出たミワは、その路上に、背中が大きく開いたピンクのセクシーなドレス姿でティッシュを配っている女性の姿を見た。またキャバクラでも新装開店したのだろう。

どんなに急いでいようと、配っているティッシュは必ずもらう。高円寺時代の習慣だ。水商売のティッシュは、男たち限定で配っているものだが、女でも手を差し出せば必ずもらえる。派遣コンパニオンのバイトで何度かティッシュ配りをした体験からいえることだが、タダのティッシュでも、およそ半数には無視されたり、拒絶されたりする。すると自分自身が拒絶されたような

気持ちになってしまうのだ。そんなとき積極的にもらいに来てくれる人がいれば、女性だろうと、二つでも三つでもあげたくなった。

ティッシュを配っている女性に近づいて驚いた。頭のとっぺんでキリリと結い上げたリトルミィのようなたまねぎヘア。振り向いた女性の顔は、ノリコだった。

「ノリコ？ なに、やってんの？」

ネットワークビジネスで月収五百万円のはずのノリコがなぜ時給千円ほどのティッシュ配りをやっているのか、ミワは素直に驚いた。ノリコも口に手を当てて、いたずらが見つかった子供のように驚いたような表情を浮かべたが、すぐに平静さを取り戻してこういった。

「どうしてもって頼まれちゃってね。こんなことしなくてもお金はあるんだけど、時間を持て余していたから、まあいいかなって。ほら、私のビジネスって、何もしなくてもお金が入ってくるでしょう」

「そっか、相変わらず、がんばってんだ」

「先月は八百万いったからね。一気に大台を目指すよ」

ノリコは陸に上がったアザラシのように鼻の穴をふくらませている。

以前は、プア・ウーマンから抜け出したノリコに引け目も感じていた。しかし、今のミワにはノリコがいくら稼いでいようと、どうでもいいことだった。

「ミワはどうして赤坂にいるの？」

小首をかしげながらノリコが聞いた。一瞬どう答えようか迷って目を伏せたが、すぐに真っ直ぐノリコの目を見つめ直していった。

「シナリオ・スクールよ、赤坂に教室があるの」

するとノリコは「ああ」と納得したようにつぶやいたあとげんなりした顔してこういった。

「だから、この前も言ったでしょう。私たち、アラサーなのよ。叶いっこない夢を追いかけていられる歳じゃないわけ。それよりも私の仕事を手伝いなさいよ。すぐにでも月に百万円くらい儲けさせてあげるから」

「いいの、私はずっとやりたかったことをやる。そう決めたんだから」

そう言葉に出して自分で驚いた。以前なら「叶うはずのない夢」といわれると、すぐに現実に引き戻されたような気分になったはずだった。しかし、きょうはそうではなかった。

自分の心の中に、なにか強い芯のようなものがあるような気がしていた。これがナポリタンのいう「信念」なのだろうか。

ノリコはミワの言葉にもひるまず、チベット産のジュースがいかに人類を救うかをとうとうと語っている。

ミワはその言葉を遮り、「ノリコも頑張ってる！」と笑顔でいって、地下鉄の駅へと向かった。

「ブラボー！　すばらしいよ、ミワ」

その夜、ノリコとのやりとりを聞いたナポリタンはオペラを見終わったあとの観客のように拍手をしながら言葉を続けた。

「ミワは、きょう、いつもきみの邪魔をしていた敵をひとつ、やっつけたんだ」

「敵って、ノリコのこと？」

「そうじゃないよ。きみがやっつけたのは、不安、という名前のモンスターさ。いい機会だから、重要な事実を教えてあげよう。同じ能力、同じ教育、同じ体験を積みながら、成功する人と失敗する人がいる。ミワはそれがなぜだと思う？」

「同じ能力や条件で、差が出たとしたら、成功した人は運が良かったんじゃない？」

「不安、か、それもあるだろうね。だがぼくのいう不安、は単なる偶然の幸運とはすこし異なる。前にも言ったが明確な目標を持った人は、張り巡らされたアンテナでいろんなチャンスに気づく、それが不安、ってやつの正体なんだ。

でも、それだけじゃあない。ぼくがカーネギーから紹介され、取材した成功者たちは、みな不安、というモンスターを心の中で倒していたんだ。その不安、は恐怖、といいかえてもいいほど強烈なものだ」

「恐怖って、高いところが怖いとか、お化けが怖いとか、そういうこと？」

「それも不安、や恐怖、という感情の種類のひとつだよ。高いところやゴーストが出そうな暗闇を怖がるのは、マンモスを追いかけていた太古から、人類がそういう場所で危険な目にあってきた経験を経て、なるべく近づかないよう、遺伝子に組み込まれたものだ。

でもね、現代社会にはそうした原始的な恐怖とはまた、別の種類の恐怖が存在する。それを恐れることこそが、多くの人の成功を阻んでいる大きな原因となっているんだ」

「みんな、何を怖がっているわけ？」

「それは批判、に対する不安だよ。ぼくは、批判に対する不安も、高いところや暗闇を怖がるのと同様に、人類の先天的な習慣だと考えている。

それもそうだろう、幽霊を信じないといったために中世では多くの男女が火炙りの刑に処せられたこともあるんだからね。

人類はみな、人と違ったことをして誰かから批判されることを恐れている。ただし、その不安は、高い場所や暗闇に対する恐怖ほどには、世の中に知られてはいない。

マンモスを倒すための石斧の代わりに、情報が生きるための武器となっている今の世では、特に批判に対する不安が多くの人々の成功を邪魔をする、大きな要因になっているにもかかわらずにね」

たしかにそうだった。高校時代の進路相談、担任の教師は夢を語ったミワに「馬鹿げた夢ばかり見てないで、もっと現実を見ろ」とあきれたようにいった。ノリコもいつも「叶いっこない夢」という。そうした言葉は、常にミワの気持ちを萎えさせた。ようやく起こした火を一瞬で吹き消す北風のように。

「他人を批判する習性は、善意という羊の皮をかぶったオオカミのような悪意なのだよ。この習性は親友の幸福を破壊するだけでは満足せず、親友を打ちのめすことによって自分の行為を正当

化しようとするものだ。

しかし、怠惰で臆病な批判主義者があたらしい世界を創造することなどありえない！ ライト兄弟は、空なんて飛べるはずがない、仮に飛べたとしてもそんな危険な乗り物を作ってどうするのかね、という批判に負けずに飛行機を作り出したのだからね」

その後、ナポリタンは、批判を恐れる心がいかに人々からイニシアチブを奪い取り、想像力を破壊し、個性を押しつぶし、自尊心を踏みにじってしまうかをとうとうと力説した。

「ミワ、きみの記憶に残る誰かからの否定、それはたかだか一部の人間が自分の物差しで判断したに過ぎず、決してミワの夢や願望をあきらめさせる権利を持つものではない。

学校の先生や、その道のオーソリティー、どんな人間の発言であったにせよ、過去の否定からきみ自身を解放することが必要なんだ。

今、きみはそうした呪縛から解き放たれつつある。だからこそぼくはきみに拍手を送ったんだ。ほんとうにすばらしい、ブラボーだよ、ミワ」

ナポリタンは握手を求めてきた。しかし、その手を握り返すミワの手は、どこか弱々しいものだった。

「でも、やっぱり不安もあるよ。ほんとうにシナリオ・ライターになれるのか、なれたとしても、この家を買戻せるほどにお金を稼げるかどうかもわからない。わからないことだらけだね」

ナポレオンの手に力が入った。

「誰だってそうさ。あたらしい世界に飛び込む時は、初めてジャングルに足を踏み入れる時のように、様々な恐れが伴うものだ。しかし、その恐れは、すべて `未知、`であることに起因しているんだ。

たしかにジャングルには毒蛇や猛獣など、ミワを恐れさせる未知なるものがあちらこちらに潜んでいるかもしれない。だけど、もしミワがジャングルに存在するダイヤモンドの鉱脈を命懸けでも見つけたいという強い願望をもっていたとしたら、毒蛇や猛獣対策として、防護服や結成、銃やナイフなど必要な装備を備え、いざという時に備えておけばよいだけのことなんだよ」

そうやってナポリタンは、ジョン・スチュワート・ミルというイギリスの哲学者の言葉をミワに紹介した。

「いいかいミワ、信念を持ったひとりの人間の力は、興味しか持たない九十九人の集団にも勝る。

きみは今、ゆるぎない信念を持とうとしている。安定や安全、変わらないものを求める人々は今後も、きみに余計なおせっかいを焼くだろう。でもミワはそれらの無責任な意見の中から、きみの目的に合致する意見だけを受け入れればいいんだ」

庭に咲く紫色の紫陽花に大粒の雨が落ちているのをミワは二階にある自分の部屋から見下ろしながら、卒業作品のテーマを考えていた。土の匂いのような雨の香りと雨音のリズムがミワの心を集中へと導いていた。

「ようし、やっぱり、あれでいくか」

ミワにはすでに書くべき、ドラマのテーマがあった。「男女間に友情は存在するか否か」というものだ。

ストーリーは、偶然、シェア・ハウスに同居することになった男女を軸に展開する。まさに「手あかのついた陳腐なストーリー」と、批判されそうな設定ではあったが、ミワには、`改良的想像力、と自らの実体験で、面白いドラマにする自信があった。

ハルヨシとのシェア・ハウスでの奇妙な同居生活。盗まれたパンツをネットオークションに出品されたり、荷物を持ち逃げされたり、いろんなことがあった。

だが、その経験を活かせば、きっとストーリーにリアリティや、それまでのドラマにはなかったアイデアをもたらしてくれるはずだ。

ミワは、そう信じた。ハルヨシに盗まれた家財道具の分は、きっちりと取り返しやるつもりだ。

「やるしかない！」

自分に気合を入れて、使い古したB5サイズのパソコンに向かった。

二百字詰原稿用紙に縦書きで百～百二十枚、ミワはパソコンのワープロソフトを使うので二十字×二十行で五十～六十枚の作品だ。

締め切りまで三か月。ミワはまず、おおまかな起承転結を組み立ててみた。講座でも習った、いわゆる`箱書き、と呼ばれる作業だ。

主人公の女の子が貧乏なオカマの同居人と出会う。同情して同居するくだりは実体験をいかせばいい。これまでドラマでおしゃれなライフスタイルとして描かれてきたシェア・ハウスが今や貧困ビジネスの道具となっている実態も描きたい。大家のタナカにも登場してもらおうか。

当初、女の子はオトコと暮らしはじめたことを彼氏にばれないよう必死に隠すだろう。そうした「枷」はスリリングかつコミカルにドラマを盛り上げてくれるはずだ。

枷とは、「手枷足枷」と使われるように心理的、物理的に行動の妨げになるものなのだが、ドラマでは登場人物の行動を制限する要素のことを指す。バレてはならないという「枷」は、きっと、よい味付けになるはずだ。

同居生活を続けていくうちに芽生える奇妙な友情。実際にミワはハルヨシに友情のようなものを感じていた。パンツを盗まれ、ヤフオクに出品されたとしても、なぜかハルヨシのことが憎めなかった。ハルヨシには、ミワが風邪を引いた時などに、そっとお粥を作っておいてくれるような優しさがあったからだった。

そんな男女間の友情をドラマでも描いてみるのだ。

あるとき、ついに主人公はオトコとの同居を隠しきれなくなってしまう。それがバレた時の彼氏の態度で、その男の意外にも嫉妬深い、嫌な面が見えるっていうのはどうだろう。理想の男かと思っていた彼氏のネガティブな側面も見えてきたのだ。

それで主人公の女の子は彼氏をとるか同居人との友情をとるか葛藤する。

結末はどうでしょうか。私だったらどうするだろうー。

そんなことを考えていたら、三時間ほどでざっくりとした起承転結はできた。以前なら、こんな箱書きさえクリアできず、挫折していたところだ。

梅雨から本格的な夏にかけて、ミワは昼間のバイトとスクールに通う時間以外のほとんどを執筆活動に費やした。

用意した起承転結の箱書きに従って、シーンやセリフを考えては、打ち込んでいったのだ。

当初は書いては消し、書いては消しの繰り返しだった。しかし、それを繰り返しているうちに登場人物の性格がはっきりしてきた。そうなる、それぞれのセリフもそれらしくなり、どんな場面の時にどんな行動をとるのかも、わかってきた。

すると奇妙なことが起きた。登場人物が想定していたストーリーラインにはないような方向へ、それぞれの`意思、で進みはじめたのだ。

最初は戸惑ったが、あえてミワは登場人物たちに`好きにさせてみた、。するとミワが当初、考えもいかなかったようなエキサイティングな展開に、ドラマは進んでいったのだ。

「これは、なんなんだろう」

ミワは興奮を覚えていた。それぞれの登場人物が、ストーリーを進めるための`駒、ではなく、ひとつの独立した`人格、として潜在意識で、交流をはじめたのだ。

彼らの`意見、は新たなアイデアをミワにもたらした。

筆はどんどん進む、この調子ならば、あっという間に、準備稿は完成するはずだった。

しかし、動き始めた登場人物たちはやがてミワを苦しめることにもなった。

卒業作品の提出期限まで残り一ヶ月を切った八月初旬の早朝、ミワは水色の朝顔が咲き誇る庭を通り、散歩に出かけた。まだ午前六時だが日差しは力強い。きょうも暑くなりそうだった。

早朝の散歩は気分転換のためだ。原稿は当初、考えていたほど簡単には仕上がらなかった。昨夜も遅くまでパソコンに向かったのだが、ワンシーンすら完成しなかった。

このところ、登場人物たちが好き勝手に暴走しはじめ、ストーリーがまとまらなくなってしまっていたのだ。

途中、ラジオ体操に参加する小学生たちがミワを追い越して駆けていく。元気いっぱい、思いついたらまめに飛んだり跳ねたりしている子供たち、奔放なその姿はミワのドラマの登場人物たちのようだった。

疲れもたまっていた。時給九百円ではじめた近所のパン工場でのバイトは朝八時から午後三時までずっと立ちっぱなし、思った以上の重労働だった。

仕事はベルトコンベアーに流れてくる細長い小麦粉の生地をねじるだけの単純労働だが、六時間も続けていると不思議な感覚に襲われた。その感覚をバイトの先輩は「繰り返していると、途中から自分が生地ねじっているのか生地にねじられているのかわからなくなる」と表現した。自分が消え、生地と同化するような感覚になるのだ。

その上、週に三回は二時間半をかけて東京・赤坂のシナリオ・スクールに通っている。そのあと、卒業作品のシナリオを書いているのだから疲れるのも無理はない。

結局、歩くのもしんどくて、そうそうに散歩を切り上げて家へと戻った。

バイトに出かけるまでには、まだ時間があった。ミワはパソコンを開き、原稿をすこしでも書き進めることにした。

異変を感じたのはそのときだ。いつもよりタイピングの誤植が多い。もともとキーボードを叩く速度はそれほど早くない。しかし、ゆっくりな分、打ち間違えることは少なかった。それなのにキーボードを打ち間違えたままEnterキーを押し、やたらと誤変換を繰り返してしまう。

右肩が重く、指先に痺れた感覚がある。そのために打ち間違えているようだ。かなり疲れているようだった。

しかし、バイトは休めない。ほんとうならばもっと働いて、母親を楽にしてあげなければならないのだ。

両手で頬を叩いて、気合を入れたあと、ノートパソコンを閉じてバイトに向かおうとした。

だが玄関をでたところで平衡感覚を失った。最初は地震でも起きたのかと思ったが揺れているのは自分自身だとすぐに気づいた。やがて右足から力が抜けてよろけるようにミワは庭の芝生の上に倒れこんでしまった。

パートに出かけようとしていた母親が、あわてて駆け寄ってくる。

「どうしたの、ミワ！」

「だいじょうぶ、ちょっとつまずいただけだから」

母は救急車を呼ばんばかりの慌てようだったが、過労くらいで一一九番通報するのがためらわれて「すこし休めばだいじょうぶだから」といって起き上がり、洋服についた土を払い、家の中に入った。

平衡感覚が取り戻せなくて、階段を上るにも苦労したが部屋に入ってベッドに倒れ込んだ。

結局、その日はパン工場でのバイトを休んだ。夕方からのシナリオ・スクールにも初めて行けなかった。心配したユウカから携帯にメールが届いた。それに「だいじょうぶ、と打ち返すのも一苦労だった。

ベッドの中では、壊れた水道管から水が地面に湧き出るようなじわじわとした焦りの感情がこみあげてきた。

卒業作品の提出期限は九月一日、締切りまであと一ヶ月を切っているのだ。こうして休んでいる時間も惜しかったが、今は原稿を書く気力がなかった。ミワは諦めて電気を消し、眠りにつくことにした。

ナポリタンに無性に会いたかった。実家に戻った当初は、毎日のように現れたナポリタンだったが、このところ、ほとんど彼が登場することはなくなっていたのだ。

あらためてナポリタンという人物について考えた。彼は一体、何者だろう。実家に帰った時から突然、夢に現れてはいろいろなアドバイスをしてくれた。

彼の言葉はいつも自分を勇気づけてくれた。こんな時こそ、ナポリタンの言葉を聞きたかった

(ナポリタン、会いたいよ)

そうつぶやきながら目を閉じたが結局、朝まで夢を見ることすらなかった。

早朝、ミワは雀のさえずりとともに目を覚ました。ゆっくり休んだせいか、いくらか身体が楽になっていた。しかし、夏のあいだ、右半身には依然、違和感が残ったままだった。

九月末、しつこかった残暑もようやく収まり、街には秋の気配が漂いはじめていた。

体の調子は良くなかったが、夏のあいだ、ミワはすこしずつ原稿を書き続け、締め切りまでに六十枚の原稿を書き上げた。そして九月一日、提出期限ぎりぎりです卒業作品を提出することができた。

そのあとも講座は続き、この日、ついに半年間のシナリオ・スクールの最後の講義が終わったのだ。

秋になって体調は回復していた。原稿を書き終え、忙しさから解放されたことが良かったのだろう。

スクールのある雑居ビルを出たミワとユウカは、二人でいつもの赤坂のファミリー・レストランに向かった。

もうひとりのメンバー、編集プロダクションに勤めるカナコは、この日が校了ということで、最後の講義が終わると、すぐに出版社に戻っていた。

長引く出版不況でカナコの会社も大変なようだ。大手出版社の下請けであるカナコの編集プロダクションにもリストラの嵐が吹き荒れているという。

席に腰を下ろした二人は、蟹のクリームパスタとサラダ・バー、そして一杯四百円のグラスワインも頼んだ。`プア・ウーマン、のミワにしてみれば、とんでもない贅沢ではあったが、この日ばかりは特別だった。

ユウカに昨日、うれしい知らせが飛び込んできたのだ。

その知らせは夕べ、ユウカから携帯のメールで届いた。なんと来年四月からのドラマに抜擢されるという。それも驚異的な視聴率を誇る、あの朝の連続テレビドラマ小説からのオファーだった。

ユウカの目標である主役でこそなかったが、存在感のある、準主役とっていい大きな役だった。

すぐにユウカに電話して「おめでとう」と告げた。ユウカは、突然の抜擢に驚いていたが、ミワには当然のように思えた。むしろユウカのような素材に、これまでオファーがなかったほうが、おかしいのだ。

「オスカーがすこし、近づいてきたよ」

茶化しながらグラスを掲げたミワに、ユウカは「まだまだよ、これから、これから」といいながらグラスを重ねた。

安っぽいファミレスのグラスは高級なシャンパングラスのように気持ちの良い音を立てることはなかったが、幸せな音色だった。

一口、ワインを口に含んでから、この場所にいるユウカを不思議な気持ちで見つめた。ユウカは大手製薬会社の創業者一族の娘だった。ファミレスの安っぽいワインではなく、コルクに染み分だけで何万円もしそうな極上のワインで祝うこともできたはずだ。

昨夜、ミワが電話口でそうするとユウカは「明日はきっと、もうひとつのお祝いがあるわ。だからミワさんと、いつもの場所でいっしょに祝うの」と答えた。

目の前のユウカは、グラスワインを飲み干している。

「では、もう一杯、乾杯のワインを頼みましょうか」

ユウカはテーブルのコールボタンを押して、さっきと同じワインを二つ、オーダーした。そして運ばれてきたワインを掲げながらいった。

「今度はミワさんのシナリオに、乾杯！」

その一時間前、赤坂のシナリオ・スクールで発表された、KTVシナリオ・コンクールに推薦される作品。それはミワが書いた『シェア・ハウスへ、ようこそ』という、タイトルのシナリオだった。

「いったでしょう。ミワさんはすごいシナリオ・ライターになるって。ミワさん伝説の始まりね」

ユウカはワインを口に含んだあとで「きょうのワインは今まで生きてきた中で、一番、おいしい！」といった。ユウカは、真っ白な肌をすっかり桜色に染めつつある。

ミワは完成したシナリオを、ユウカとカナコにだけはみせていた。それを読んだユウカは「選ばれるのは絶対に、ミワさんの作品だ」といっていた。それを確信していたからこそ、きのうの電話でいっしょにお互いを祝いたいといったのだ。

この美貌に、この心配り、お金持ちなのに安いワインをこんなに幸せそうに飲む。自分が男なら、間違いなくユウカに恋しているだろう。

上機嫌なユウカとは正反対に、ミワは浮かれるような気分ではなかった。

数時間前、最後の講義が終わったあとでミワは講師の部屋に呼び寄せられている。そこで、白髪交じりのボブヘアが似合うトミナガはこう告げたのだ。

「ルリガキさんの作品を選びましたけれど、このレベルではKTVさんに、送るわけにはいきませんよ。締切りまでの、これから二週間、徹底的に推敲を重ねていただきます。まずは赤ペンで指摘した場所をもう一度、考え直して、あさって持ってきてください」

渡された原稿をめくって驚いた。紅ショウガでもぶちまけたかのようにミワのシナリオは赤ペンのインクで真っ赤に染まっていたからだ。

このスクールの推薦作は、ここ三年ほど受賞を逃しているという。今年もダメだったら推薦枠を取り消される危機にある。そこで今回は受賞レベルに満たないとスクール側が判断した場合、推薦は見送るというのだ。

たとえ推薦されたとしても、コンクールの最優秀賞に選ばれる保証は一切ない。まさに、これからがほんとうの勝負なのだ。そう考えて、ミワは気を引き締めていた。

一方、ユウカは二杯目のワインですでに、ほろ酔い状態になっている。

「いつかミワさんの書くドラマに主演させてね、約束よ」

ユウカははしゃいでいる。実はまだ、推薦作に決まったわけではない。ユウカに言おうとしたがやめた。自分がドラマに出演することが決まったことより、ミワの作品が選ばれたことを喜んでくれている、ユウカの気持ちに水を差したくなかったのだ。

抱きしめたくなるほど可愛いユウカに、同性が好きだといったハルヨシの気持ちがすこし理解できた。

「そうね！ その夢は三年以内に叶えるよ、絶対にね」

ユウカは笑顔で指切りを求めてきた。

ユウカのドラマ出演祝い、そしてミワの原稿がシナリオ・コンクールの推薦作品、候補、に選ばれたお祝いは、二時間ほどで終わり、ユウカは迎えに来たマネージャーの車に乗って去っていった。

先日まで、ユウカは赤坂駅から地下鉄に乗って帰っていた。しかし、今やマネージャーの送り迎え付きだ。

ファミレスの階段を下りて赤坂の街に出たミワは夜空を見上げた。すでにユウカは夢への階段を上りつつある。今度は自分の番だ。

「思考は現実化する、というナポリタンの言葉を思い出していた。自分がシナリオを書いたドラマにユウカが主演する、そんなことが現実のものになったら、どんなにうれしいことだろう。

しかしシナリオ・コンクールに推薦されることも、受賞作品に選ばれることも、ユウカの主演作のシナリオを自分が書くことも、そこがゴールではないはずだ。

なぜなら自分は、あの『素晴らしき哉、人生！』のように、世界中の人々を感動させる作品を世に送り出し、その見返りとして年収を一億円にするのだから。こんなところでつまずいてなんかいられない！

そう考えた時だった。頭の中に異変を感じた。なにかが弾けたような感覚があった。次の瞬間、突然、視界に映る星空が歪んだ。

エフェクトをかけた映像のように星が二重に見える。やがて体が大きくぐらついたかと思うと、暗幕をひいたかのように、すべての星が瞬きをとめて消えうせた。

その直後、ミワの身体は、無敵のヘビー級チャンピオン、アポロ・クリードの右フックを浴びたロッキー・バルボアみたいにゆっくりと、乃木坂通りの歩道に膝から崩れ落ちていった。

とても暖かい場所だった。小学校に上がったばかりのミワはアームチェアに座った父の膝の上
にいた。

「ねえパパ、お話を聞かせて」

いつものように父親にねだった。父はひとり娘の願いをうれしそうに受け入れた。

父の話の聞くとミワはいつもワクワクする気分を味わっていた。しかし、きょうはなぜか、父
が何を話しているのか、よくわからなかった。

不思議に思ってミワは、父の顔を見上げて驚いた。そこにいたのは父ではなく、血まみれの大き
なクマのぬいぐるみだったからだ。

ぞっとするような寒気を覚えて、ミワは夢だと気がついた。起きて、悪夢を終わらせなければ
ならない、ミワはそう考えていた。

一耳の奥にかすかに母の声が届いた。誰かにお礼をいっているようだ。目を開けてみる。する
と母は背中を向けて立ち去る、白衣の男に頭を下げていた。

振り向いた母はミワが目を覚ましたことに気づいてベッドに駆け寄ってきた。

「気が付いたのね、よかった」

ため息混じりに安堵の声を漏らす母。ミワは四方を白い壁に囲まれた病院のベッドに横になっ
ていた。

「軽い脳梗塞だって。夏のあいだ、ほとんど寝ないで原稿を書いていたでしょう。無理するか
らよ」

脳梗塞という響きがすぐにピンとは来なかった。確か中高年に起こりやすい脳の血管がつまる
病気だっただろうか。そんな病気になぜ自分が？　そういえばまだ若い人気シンガーや女性アナ
ウンサーが若年性の脳梗塞で倒れたという話題をワイドショーで見た。まさか、それが自分に降
りかかったというのか。

それからすぐに自分の体の異変に気が付いた。右手に、感覚がないのだ。

（一お母さん、右手が動かない！）

叫ぼうとしたうまく言葉にならない。呂律が回らないのだ。

母親は憐れむような視線を投げかけながらも無理に笑顔を作ってこういった。

「右半身に麻痺が残る可能性があるって、先生がおっしゃっていたわ。でもね、何年か、リハビリ
を続ければ元通りになる可能性もあるって」

頭が真っ白になった。そのあとですぐに頭に浮かんだのは、紅ショウガをぶちまけたような原
稿だった。

完成させなければ、チャンスを逃してしまう。シナリオ・コンクールの締め切りまで、あと二
週間しかないのだ。

ベッドに横たわったまま、左手をゆっくりとあげて、指を曲げてみた。

一だいじょうぶだ、左手は動かせる。左手だけでも原稿を仕上げてみせるつもりだった。

ミワは母親に自宅からノートパソコンを持って来るよう頼んだ。そんなミワに母親は悲しげな
笑みを浮かべながらこういった。

「先ほど、シナリオ・スクールの先生がいらしてね、今回は無理しないようにって……」

ミワは倒れたのが昨夜のことと思っていたが、病院に運ばれたのはおととい夜、丸二日間、意識を取り戻さなかったという。母親は「軽い脳梗塞」といったが、そうではなかったのだ。

きょう、ユウカとカナコ、そしてシナリオ・スクールの講師、トミナガが見舞いに来たという。

そしてトミナガは、去り際に「今回は、くれぐれも無理をなさらないよう、お伝えください。回復すればきっとまたいつかチャンスはめぐってきますから」といったという。なんという優しくも残酷な言葉なのか。トミナガはミワに、シナリオ・コンクールへの応募を、今回は断念するよう、母親に告げていたのである。トミナガの言葉の意味を察したミワは、左手で顔を覆うと、あまりの情けなさに、笑いさえ浮かべながら涙を流した。

「どうして私って、こうなんだろう」

回らない呂律でつぶやいた。

いつもこうなのだ。あとすこしのところで挫折に見舞われる。芸大を受験する時も前日にインフルエンザを発症して断念した。就職活動をしていた時も大手映画会社の最終面接まで残りながら、就活の疲労から貧血で倒れてしまい面接会場に行けなかった。今度こそ、チャンスをもものにできるかとおもったら、これだ。

夏の盛りに始まった右手のしびれ、それが脳梗塞の予兆だったのだろう。あのとき、どうしてすぐに病院に行かなかったのか。今さら悔やんでも、もはや後の祭りだった。

(どこまで、ついてないのか)

心の底からそう思った。

「そういう星の下に生まれたのよ」

嘲笑を浮かべながら、渋谷駅でそういったノリコの言葉が頭にこだました。

もしかしたら、ほんとうにそうなのかもしれない。ナポリタンは無責任な批判を受け入れるなといった。だが、こうした現実を突きつけられると、的を射ているのかもしれないと思わざるを得なかった。ミワはいいようのない絶望感に胸をさいなまれた。

一方で絶望と同時に、安どの気持ちが胸に広がるのをミワは感じていた。シナリオはまだ完成していない。病気で倒れた、ということであれば期待をかけてくれているユウカも仕方ないと思ってくれるだろう。そして同情してくれるに違いない。

そんなことを考えている自分に気づいてミワは、ますます己が情けなくなっていた。

きっと自分には負け犬根性がしみついているのだ。そんな自分が年収一億のシナリオ・ライターだなんて！

ミワは奇妙な長い夢から覚めたような気分で力なく笑った。その笑顔は右半身が麻痺しているせいで、歪んだものになっていた。

およそ二カ月の入院生活を終えて、ミワが母といっしょに実家に帰ったのはあたらしい年を迎えてからだった。

ひさしぶりに帰ってきた家の庭では母が育てたスイセンが白く可憐な花を咲かせていた。

リハビリのおかげで下半身はかなり動くようになったし、喋るにも不自由はなくなっていた。だが、相変わらず右手は自由にならない。

左手に力を入れながら、手すりを使って二階の自分の部屋に入る。目に入ったのは、`三十歳の誕生日までにシナリオ・ライターとして年収一億円を達成する、と書かれた、宣言文だった。

ミワは自虐的な視線を投げかけた。年収一億円どころか、今のミワにはアルバイトをして、この家の家賃や生活費を稼ぐこともままならない。

左手を伸ばして、その紙を破ろうとした。しかし、なぜかそれはできなかった。

「これからどうしよう」

そうつぶきながら、うつろな目で壁に貼った宣言文を見ていた。

「私は三十歳の誕生日までにシナリオ・ライターとして多くの人々を感動させる作品を世に送り出し、見返りとして年収を一億円にする。そのためにできることが頭に浮かべばすぐにでも行動する、か」

しばらくその紙を見つめていたあとで、ふらりと立ちあがった。

廊下にて、隣の部屋のドアノブを廻した。カーテンに閉ざされた真っ暗な部屋。そこは亡くなった父の書斎だった。

父が他界してもうすぐ二十年になろうとしているというのに、母は父の部屋を生前のまま残していた。

電気をつけた。左側には壁一面に設けられた本棚。正面にはマホガニーの机とイス。そして右側には、父がいつも読書をしていたアームチェアがある。

父の記憶はほとんどなかったが、このアームチェアで絵本を読み聞かせてくれていた記憶だけはあつた。

電気を消して、ミワはアームチェアに腰を掛けた。すべての体重を椅子に掛けて目を閉じる。まぶたを開いたとしても真っ暗な、その空間でミワは目を閉じたまま何も考えることはなかった。

そのまま、どれくらいの時間が経ったのかもわからなかった。

そうしているとあの人はやってきた。

自分が眠りについていないことはわかっていた。目覚めているときに彼と出会うのはこれが初めてのことだった。

「ずっと、どこにいたのよ」

ミワはすねたような口調で語りかけた。

「なるほどなるほど、怒っているというわけだ」

「あなたがいなくなってから、すべてがおかしくなった」

ナポリタンは、初めて悲しそうな顔を見せた。

「そもそもぼくはずっとミワのそばにいられるわけじゃない。だけど、あまりに早くきみと別れてしまったことをぼくはずっと悔やんでいた。だから天使がぼくときみを再会させてくれたのも

かもしれない。だけど羽すらも与えてもらえない二級の天使だったようだね。もうすこし、きみと話せばよかったんだけど」

「人が心に願うことは、必ず現実のものになる、そうじゃなかったの？」

「その通りだ」

「私が願ったのは、不自由な身体になることなんかじゃなかった」

「そうだね。だが、それはきっと克服できる。そしてこの逆境はきみにとって大きな財産になるはずだ。なぜなら、あらゆる逆境の中には、それと同じだけの、あるいはそれ以上の成功の種子が宿っている、のだからね。

十の苦しみがあれば十か、それ以上の喜びの種が、二十の悲しみがあれば二十か、それ以上のうれしさの種が、その中に必ず宿っているんだ」

「今の絶望にも、それと同じだけの希望の種が宿っているということ」

「その通りだ。ミワの身に良くないことが起きたとしよう。しかしそれが最終的に良いことなのか、悪いことなのかは、ミワ自身がそのできごとによってどういう行動をとるかによって決まるんだ。

そのときは最悪に思えるできごともあとになってみれば、人生の転機となるすばらしいチャンスだったと思えるような一時的な失敗かもしれない。そうなるかかどうか、決めるのはミワ自身だよ」

「私次第ってこと」

「ミワこそ、きみの運命の支配者であり、きみの魂の船長なのだからね。人生の航海中には、ときに何ものかが裏にいて、わざわざあらゆる失敗をさせて人々をテストしているかのように思える場合さえある。だが、その挫折にめげずに立ち上がり、前進していく人だけが目指す行き先にたどり着けるんだ。そのとき世界はこう叫ぶ。『おめでとう！ きみなら、きっとできるとわかっていたんだ、ってね。いいかい、いかなる挫折や困難も一時的なものに過ぎない。そして、そこには必ず成功の種子が宿っている』

ナポリタンはミワの肩にそっと手をおいた。その手の暖かさは、懐かしい温もりのような気がした。

「最後にぼくの大好きな詩をミワに贈る」

負けると思ったらあなたは負ける。

負けてなるかと思えばあなたは負けない。

勝ちたいと思っても

勝てないのではないかなと思ってしまったら、

あなたは勝てない。

負けるのじゃないかな、と思ったら

あなたはもう負けている。

というのも、成功は人の考えから始まるからだ。

すべては人の考えから始まるのだ。
すべてはあなたの心の状態によって決まるのだ。

自信がなければあなたは負ける。
上に登りつめるには高揚した精神が必要だ。
何かに勝つためには自信が必要だ。

人生の闘いに勝つのは、
必ずしも最も強くて最もすばしっこい人ではない。
最終的に勝利を収めるのは
`私はできる、`と知っている人なのだ。

朗読し終わるとナポリタンは目を開けて、ミワに向かって小指を差し出した。
「約束して欲しい。ミワにはすばらしい人生を築き上げる能力がある。だから絶対に諦めないってね。チャンスは思いがけない形でやってくるだろう。これはチャンスの持つトリックのひとつなのだ。チャンスは常に背後から忍び寄ってくるという、いたずらな習性を持っている。また時にチャンスは不運とか、一時的な敗北の陰に隠れてやってきたりもする。だから多くの方はチャンスをつい見逃してしまうことになりかねないのだよ」

「わかった、約束する」

ミワが小指を絡めた。するとナポリタンは寂しそうな笑顔を浮かべながら、両手でミワの右手を包んだ。ナポリタンの両手は、南の島に降り注ぐ太陽の光のように温かく未知のエネルギーが伝わってくるようだった。

ナポリタンは、手を離した。そして彼は漆黒の闇に消えていった。ミワはもう二度とナポリタンには会えないような気がしていた。

ノックの音でミワは目を開いた。ドアを開けて母が父の書斎に入ってきた。ミワの右手にはまだナポリタンの手の温もりが残っていた。

「どうしたの、電気も付けないで？」

「すこし考えごとをしていただけ」

ミワが答えると、母は懐かしそうな顔をした。

「お父さんもよく、部屋を真っ暗にしてその椅子の上で考えごとをしていたわ。親子ねえ」

「親子は似る、ね、なるほどなるほど」

ミワは何も考えずにそう返すと母は驚いたように口を開けてから笑いながらいった。

「それって、お父さんの口癖よ。いやあねえ、親子って口癖も似るのかしら」

母の言葉に、ミワは左手に力をいれ、思わずアームチェアから上半身を起こした。

「ちょっと待って、`なるほどなるほど、ってお父さんの口癖だったの？」

「そうよ、ミワが幼いながらもなにかを主張するたびに、お父さんはうれしそうに`なるほどなるほど、っていったわ」

ナポリタンがいつもいっていた`なるほどなるほど、という言葉、それはミワが小学三年生の時に交通事故あとで亡くなった父の口癖だった。

父とナポリタン、なにか接点はあるのだろうか。ミワは思わず母にたずねた。

「じゃあ、お母さん、ナポリタン・ヒルっていう人、知っている？」

母は、懐かしそうに目を細めながら答えた。

「ナポレオン・ヒルね。お父さんが世の中で一番、尊敬していた人よ」

母によると父は結婚後に、ナポレオン・ヒルの『The Think and Grow Rich』—「思考は現実化する」という本と出会い、人生が大きく変わったという。

小説家になるという夢を諦め、保険会社に就職したものの、平凡な成績しか収められなかったが、ヒル博士の本を読んで以来、トップセールスマンになったというのだ。

さらに父は、ヒル博士の本をことごとく読んではそれを実践していった。そのことが会社を興すきっかけにもなったのだという。

「当時のお父さんはね、なにかあるたびに`ナポレオン・ヒルならばこうするだろう、といていたの。ミワったら、すっかりお父さんのお話が気に入っちゃって。

でも幼いものだから`ナポレオン、を`ナポリタン、って思い込んで`ねえパパ、ナポリタンのお話、聞かせて、っていつもいっていたのよ。

小さい頃からそうだった。早とちりのおっちょこちょい。`キティちゃん、は`テキィちゃん、`ディズニーランド、は`ネズミーランド、`、そういうことがいっぱいあったんだよ。でもね、お父さんたら`ナポレオン、を`ナポリタン、っていう、あなたがとても可愛かったらしくて、アームチェアの上でミワを膝に抱きながら`いいかミワ、`ナポリタン、ならばこういう時、`、って、ずっと、あなたにヒル博士の話をお聞かせしていたの」

ミワは思わず口を押さえた。その手は動かないはずの右手だったが、そのことよりもミワは、今の母の話に驚きを隠せないでいた。

父親のような温かい笑みで語りかけていたナポリタン。その会話は、まさにミワ自身の潜在意

識の中に埋もれていた父の記憶だったのだ。

そうだった。`ナポリタン、という言葉にどこか懐かしい響きを感じたのは、なにも、それが今はあまり見なくなったスパゲティの名前だからというわけではなかったのだ。いつも父から聞いて、脳裏の奥底に焼きついていた言葉だったからだ。

このアームチェで、自分を抱きながらいろんな話を聞かせてくれていた父。おぼろげながら幼いころの記憶が脳裏に蘇ってきて、ミワの目からは熱い大粒の涙がいくつもこぼれ落ちた。

「私の言葉はきみの言葉だ」

ナポリタンがいていた言葉の意味も今、理解できた。父は、幼い私の潜在意識に自らがヒル博士から学んだ成功哲学を植え付けていてくれた。ミワはその自らの潜在意識と夢の中で対話していたのである。それは父が遺した、何よりも莫大な遺産だったことにミワが気づくまで、それほど時間はかからなかった。

ミワはあれから毎日のように父の書斎に入り浸った。本棚に並ぶ父親の愛読書、ナポレオン・ヒル博士の著書を読むためだ。

右手を伸ばして一冊の本を本棚から引き出した。不思議なことにナポリタンの両手に包まれた、あのときからミワの右手は徐々に動くようになってきていた。

その本を開いてミワは驚いた。そこにはヒル博士の若き日の写真が掲載されていた。黒髪でレトロなスーツ姿の外国人男性。三十代半ばくらいだろうか。モノクロ映画時代のハリウッドスターのようにも見える。そんなヒル博士の面影は、まぎれもなく夢に現れたナポリタンのものだった。

父は何度も、この本を開いたのだろう、カバーはぼろぼろになっている。ページをめくると父が記したメモや、色とりどりのマーカーがすべてのページにあった。同じ場所に違う色でマーキングしている部分もある。

そこに書かれているのは、まさにナポリタンが夢の中でミワにいつも語っていた内容だった。

黒人の小さな女の子が農場主を打ち負かした話、一週間以内に百万ドルを手にする決意して、それを現実のものにした牧師、そして発明王エジソンや、自動車王フォードのエピソードーナポリタンが語っていたのは、まさにこの本に書かれているものだった。

ただし何度も精読していくと、ナポリタンが語った内容にはヒル博士の言葉ではないようなものも含まれている。

ナポリタンの言葉は、あくまで父が自ら理解し、アレンジした内容を幼いミワに話したものだから、それは当然のことだった。

父の書斎にあった本によればヒル博士が、その著書『The Think and Grow Rich』を出版したのは一九三七年のことだった。

この本は一九〇八年、当時、駆け出しの新聞記者だったヒル博士が当時、全米屈指の大富豪だった「鉄鋼王」アンドリュー・カーネギーへのインタビューで成功の秘訣についてたずねたことがきっかけで生まれたものだった。

そのとき、ヒル博士はカーネギーから、成功のための`ノウハウ、を聞かされた。そしてそ

のノウハウ、を体系化したひとつのプログラム、にするよう依頼されたのだ。

以来、ヒル博士は、カーネギーの紹介状を手に、様々な分野で成功した人にインタビューを試みた。その中には「発明王」トーマス・エジソン、ウィルソン大統領、「自動車王」ヘンリー・フォードといったそうそうたる人物がいた。そして二十年という歳月をかけて『The Think and Grow Rich』という本にまとめて発表したのだという。

大恐慌のさなかに出版されたこの本は、瞬く間に全米のベストセラーとなり、以来、成功者たちのバイブルになってきたという。

今に至るまで「夢は必ず叶う」と訴える自己啓発系の本は星の数ほど出版されてきた。しかし、そのすべての出発点はヒル博士の本なのだという事も知った。

ノリコから誘われた、あのマルチのパーティーで「夢は叶うんだ」と叫んでいた茶髪のジャニーズ系松崎しげる、その言葉がナポリタンの言葉と似ているとミワは感じた。だが、ジャニ松の言葉も、ヒル博士がまとめた成功哲学の亜流に過ぎなかったのだ。

ヒル博士の著書にすっかり夢中になったミワは、その本の中に登場する成功者たちにも興味を持った。発明王エジソン、鉄鋼王アンドリュー・カーネギー、自動車王ヘンリー・フォードといった偉人たちだ。

そうした人物の伝記も父の書斎には取りそろえられていた。ミワは、それらの本をむさぼるように読んだ。

やがてミワはヒル博士の本の中に登場する、ひとりの偉人に強く心惹かれるようになった。その人物の生き様はまさにヒル博士のいう、燃えるような願望や信念の力、そして思考は現実化するという、成功哲学を体現しているように思えたからだ。

それからミワは、その人物に関するあらゆる書物を集めては精読した。その人物のことを知れば知るほど、ミワは魅了された。このような偉大な人間がほんとうに実在していたのか、疑わしいほどだった。ミワは彼のことがもっともっと知りたかった。

その願いは思わぬ形で叶った。

信じられないようなできごとが起きたのは、ミワがその人物に夢中になって、およそ一ヶ月が過ぎた、真冬の夜のことだった。

ミワの人生における最大の奇跡、澄み切った夜空に星が瞬く真冬の夜に起きた。
いつものように父の部屋で本を読んだあと、電気を消してアームチェアに座り、すこしばかりまどろんだ時のことだった。

ミワは人の気配を感じて、そっと目を開けた。すると、そこには、日に焼けた肌に、みすぼらしい服をまとった、ひとりの男が竹の杖を手に立っていた。

ミワは目を見開いた。その人物こそ、この一ヶ月、ずっとその生涯をたどっていた人物だった。

あまりの強烈なオーラに畏敬の念を抱いて、ミワはひれ伏しそうになった。すると男は、ミワにそのままにいるよう、手で制した。

眼鏡の奥には黒い大きな瞳。その目で数々の地獄絵図も見てきたであろうに、どこまでも澄み切っていて、穏やかな眼光だった。

「バプー……」

ミワは、つい、その人物の愛称を口にした。そのあとであわてて敬意を込めた呼び名にいい直すと、その人物は「バプー」と呼んでくれて構わない、といった。

ミワには聞きたいことが山ほどあった。

なぜ、あのような壮大な願望を持つことができたのか。なぜ、あのような無謀とも言える挑戦を続けることができたのか。なぜ、あのような迫害を受けながらも信念を貫くことができたのか。なぜ自らの命を投げ出してまで、人々を救おうとしたのか。

ミワがなにかをたずねると、彼はすべての質問に謙虚に、正直に答えてくれた。

バプーとの対話に、ミワは驚きを覚えていた。なぜなら彼の言葉には自伝にすら、書かれていないものも多かったからだ。

バプーがミワの前に姿を見せたのは、その日だけではない。

父の書斎のアームチェアに座り、深くリラックスした状態で目を閉じると、いつでもバプーは現れた。ミワはこの「交信室」で彼と毎日、およそ一ヶ月間にわたって、語り続けたのだ。

やがてあるアイデアが閃いて、ミワは彼に「バプーのこと、もっと多くの人に知ってもらいたい」といった。すると彼は優しく微笑んで「きみが正しいと信じることを行いなさい」といった。

ミワがひらめいたアイデア、それはバプー自身が語った、彼の生き様や言葉を、物語にして発表することだった。

最初は脚本にしようと思っていたのだが、彼の語った言葉や体験談は、とても数時間のドラマや映画のシナリオにまとめきれるものではなかった。そこでミワは脚本の形式にこだわらず小説という形で彼の体験や考え方を記録に残すことにしたのだ。

小説を書くのは初めてのことだ。まだ右手も満足に動かなかったが、キーボードを叩く指は毎晩、止まらなかった。

真冬にはじめたその作業は、庭の木々の芽吹く春まで続いた。

「人間は自分が考えたような人になる」。

バプーとヒル博士、そしてナポリタンがみな同様に語った言葉を最後に打ち込んでミワはその

原稿を、ある人物にメールで送った。

原稿を書き終えてから、ちょうど一年が過ぎていた。二十九歳三ヶ月になっていたミワは二月、まばゆいばかりの光に包まれた巨大なシアターの深紅のシートに座っていた。

イルミネーションに彩られたステージ上では、これまでスクリーンの中でしか見たことのないハリウッドスターたちが、次々と登場している。

ここはアメリカ、ロサンゼルス州ハリウッドにあるドルビーシアター、アカデミー賞授賞式の会場だ。

むせ返るような甘いコロンの香り中、ブルーの不慣れなロングドレスにハイヒールを履いて、招待客しか入ることが許されない、この会場にいる自分に、ミワ自身も戸惑っていた。

二十七歳のクリスマス・イブには寒風吹きすさぶ渋谷のスクランブル交差点でゴムの伸びきったパンツをはいて看板を持っていたのが、今は世界の映画界で最高の荣誉とされる舞台を客席で見守っているのだから。

ちなみにきょうのパンツは新品だ。それもパンティーラインがドレスに浮き出ないように、生まれて初めて履いたTバックだった。

不自由さが残っていた右手は、リハビリのおかげでほとんど後遺症は消え失せた。「絶対に脳梗塞の後遺症を克服してみせる」という誓いが、現実のものになってきていた。

客席に腰を下ろして、ミワは、この二年と三ヶ月間を思い出していた。

ハルヨシが家財道具を持ち逃げしたこと。当時は途方にくれたが今から考えれば人生の大きな転機だった。それがきっかけで記憶の奥底にいた`ナポリタン、と出会ったのだから。

ナポリタン=父の言葉が、すべての出発点だった。

ナポリタンと出会ってシナリオ・ライターになる夢を再燃させた。もっとも、その夢は脳梗塞に倒れ、挫折したかに思えた。しかし、それは一時的な敗北に過ぎなかった。そのことでヒル博士の著書と出会い、そして`バプー、とも出会えたのだから。

『富との出会い、それはあまりにも大きなスケールで目の前に飛び出してくるので、ふつうの人は自分が貧しかったころには一体、それがどこに隠されていたのかと戸惑ってしまう』

ナポリタンはそういった。ミワにとって原稿を書き終えてからの一年間はまさに、それを実感する一年となった。

`バプー、のことを書いた小説を、誰かに読んで欲しくてミワはシナリオ・スクールで出会った、編集プロダクションに勤めるカナコにメールで送った。そこからミワの人生は劇的に動きはじめた。

内容に驚いたカナコが、大手出版社から脱サラした編集プロダクションの社長に見せ、その社長がミワの原稿を「これは絶対、出版するべきだ」と出版社に働きかけたことで、それは現実のものとなったのだ。

出版に至るまでカナコは、その豊富な世界史の知識で、ミワの小説を様々な角度から検証し、あやまりがあればただし、さらに当時の世界の社会的背景などの資料も用意してくれた。おかげで小説は準備稿から、さらにリアルなものとなった。まさにすばらしい`協力者、となってくれたのだ。

その功績が認められ、リストラの嵐が吹き荒れていた編集プロダクションの契約社員だったカナコは、今では大手出版社に引き抜かれ、正社員として迎え入れられている。

出版されたミワの小説はたちまち版を重ね、日本国内で百万部を超える売上げを記録しただけでなく、世界二十八の国と地域の言葉に翻訳され、ミリオン・セラーとなった。

その時点で、ミワの収入はナポリタンと約束した金額をはるかに上回っていた。

もっともお金の管理は、ファイナンシャルプランナーのセキグチの会社に任せてあるので、くわしい額をミワ自身、よくわかってはいなかった。だが、お世話になったセキグチにマネジメント料という形でお礼ができたのはうれしかった。

また競売にかけられそうだった家の任意売却に応じてくれた恰幅の良い不動産業者のカナイにも、家を相場より高い値段で買い戻すことで恩返しができる。

ミワが成功したという噂を聞きつけて、ノリコが三十万円を借りに来たのは半年前だ。

「あなたは月収五百万円でしょう？」

いぶかるミワに、ノリコは正直に白状した。「広告塔」の役目を頼まれていたらしい。「シェア・ハウスを出て南青山のマンションに移りパテックフィリップを手に入れた女」として、あたらしい会員を勧誘する「サクラ」を演じるよう頼まれていたというのだ。南青山のマンションも高価な時計もマルチ業者が用意したものだったらしい。実際のところ、怪しげで高価なジュースが広まるわけもなく、ノリコは借金を重ね、自宅には毒々しい紫色のジュースが山積みとなっていた。

ミワは、ノリコが貸してほしいという三十万円の代わりに、ヒル博士の著書を贈った。活かせるかどうかは、もちろん、ノリコ次第だが。

ノリコの次にシェア・ハウスで同居したハルヨシは去年テレビで三カ月に渡って放送されたドラマ、『シェア・ハウスへ、ようこそ』を見て、ミワに電話をかけてきた。

KTVのシナリオ・コンクールに応募しようとしていたミワの脚本は、シナリオ・スクールの講師、トミナガがミワに許可をとった上で筆を加えた。そしてトミナガがそれを直接、テレビ局に持ち込んだ結果、いきなりレギュラー・ドラマ化されたのだ。

トミナガとの共同脚本という形ではあったが、シナリオ・ライターになるという夢も叶った。ドラマはワンクール平均一七・四％という高視聴率を記録した。ドラマは小説化されて出版された。その印税もミワには入ってきていた。

ハルヨシは電話でドラマに登場するオカマのモデルが、自分であることに笑いながら抗議した。そのあとでミワの家財道具を持ち逃げしたことを泣きながらあやまった。

家財道具を売り払ったお金を、故郷の福島に帰るための電車賃にあてたという。

今は郡山で小さいながら美容室を営んでいるという。ハルヨシはミワの著書を読んで「夢は必ず叶う」と勇気づけられ、独立して美容室を立ち上げることを決意したという。

ミワの著書は世界的なベストセラーになっただけではなかった。ハリウッドの大物プロデューサーによって、ミワの小説を原作とした映画が撮影されることになったのだ。

公開された映画の中身を映画評論家たちは絶賛した。それまで、ある種の聖人だと思われていた彼の苦悩や迷い、絶望やそこから希望を取り戻す勇気といった人間性が描かれていることが高

く評価されたのだ。同じ人物をテーマにしたリチャード・アッテンボローの映画を超えるという評論家も多数いたが、そうであれば、それは監督の力だろう。

その映画はアカデミー賞の九部門でノミネートされている。ミワは今、原作者としてプロデューサーからドルビーシアターに招かれているのだ。

いよいよアカデミー賞授賞式のハイライト、作品賞発表の時が刻一刻と近づいている。

タキシードを着た司会者が、今年作品賞のプレゼンターに赤いリボンのついたゴールドの封筒を渡す。受け取ったのはハリウッドで何十年も第一線で活躍する大女優だ。

胸元が大きく開いた真っ白なドレスに身を包んだ、その女優は背筋をまっすぐに伸ばして歩き、センターのマイクの前に立つと、細く美しい指で封筒の赤いリボンをほどいた。

ステージに配置された巨大なモニターの中では候補作に選ばれた五作品の監督が固唾を飲んで、開封作業を見守っている様子が映し出されている。それを見ているミワも自分の胸がたかなるのを感じていた。ミワは指を組み、あの映画が作品賞に選ばれることを願った。

大女優は開いたゴールド封筒の中に視線を送り、白い歯をみせて、いたずらっぽい笑みを浮かべたあとで、封筒の中の赤い紙をとりだした。そして今年度のアカデミー作品賞のタイトルをたからかに読み上げた。

「`THE TRUTH GANDHI、!」

満席の会場に、スタンディングオベーションが嵐のように巻き起こる。

『ザ・トゥルース・ガンジー』、それはミワの小説のタイトルをそのまま映画の題名にしたものだった。

客席にいた主演男優や監督、そしてミワに熱烈なオファーをくれたプロデューサーが歓喜の声とともに弾けるように、一斉に立ち上がった。そして司会者にうながされるままに階段を上ってステージに向かう。

その中には艶やかな深紅のサテン地のドレスに身を包んだ日本人女優の姿もある。ハリウッドで今、現代によみがえった`東洋のヘプバーン、として人気急上昇中のユウカだ。

ユウカは、十三歳の時からガンジーと共に歩んだ妻、カストゥルバの若き日を演じたのだ。

朝のドラマで一躍、脚光を浴びたユウカは、その後、ミワがシナリオを書いたドラマ「シェア・ハウスへ、ようこそ」で主演、日本国内での人気が沸騰した。

ユウカのルックスと演技に対する熱狂的な支持は日本にとどまらなかった。You tubeなどから火がつき、まずはアジアに、やがて、欧米にまで飛び火した。

その人気に注目した『ザ・トゥルース・ガンジー』のプロデューサーが映画のヒロインとしてユウカを抜擢したのだ。

ユウカは自慢の真っ白な肌を小麦色に焼き、ガンジーの妻、カストゥルバになりきり、流暢な英語で若き日のガンジーを支えた妻の役を完璧に演じきった。

その演技が評価され、ユウカはさきほど助演女優賞にも選ばれている。日本人女優が助演女優賞に選ばれるのは一九五七年にミヨシ・ウメキが『サヨナラ』で受賞して以来、およそ半世紀ぶ

りの快挙だった。

ユウカはハリウッドに認められた。いつかナタリー・ポートマンのように、主演女優としてオスカーを手にするだろう。

歓喜の光景を眺めながら、あらためてミワはこの映画の主人公である `バプー、との出会いを振り返った。

`マハトマ・ガンジー、。

非暴力主義を唱え、インドをイギリス支配から独立へと導いた人物。`マハトマ=偉大なる魂、と称されながらも、それより `バプー=お父さん、と呼ばれるほうを好んだ、偉大なる人物。

人々から愛され、人々の争いを止めるために断食をし、命を投げ出そうとまでした彼こそ父の書齋、`交信室、で毎晩、インタビューをしていた人物だった。

`交信室、それは潜在意識が無限の知性と通じ合い、時空を超えて、交流しあえる場所。ヒル博士も、そこでは現実の姿で現れた、ナポレオン・ボナパルトやダーウィン、エマーソンといった、過去の偉人たちと話し合っていたことを著書で告白している。

現れたガンジーは、もちろんミワの想像上の人物に過ぎない。しかしガンジーは自伝に書かれていることはもちろん、ミワの読んだ、どんな本にも載っていない体験談を語ってくれた。

幽霊や蛇が怖くて灯りをつけていないと眠れなかった少年時代。こっそり食べた牛肉の美味しさとそのあとの罪悪感。十三歳という若さでの妻、カストゥルバとの出会いとケンカを繰り返していた日々。ロンドンで夢中になったダンスのこと。南アフリカで体験した差別とそのあまりの理不尽さに対する怒り。インド独立の転機となった、三百八十キロに及ぶ `塩の行進、の舞台裏。そしてヒンズー教徒とイスラム教徒の内戦状態を終わらせた命懸けの絶食のとき、死の淵で考えていたこと一。

時々の心境を `バプー、は時に目を輝かせながら、時に思い出して歯を食いしばり、涙しながら語ってくれたのだ。

驚いたことに彼は凶弾に倒れたときのことや、自らの国葬が行われた時のこと、遺灰がヤムナー川とガンジス川に巻かれたときのことまで語った。

ミワは、単に彼が語った言葉を文字にしたに過ぎない。それはまさに無限の知性による `独創的想像力、が生み出した作品だった。

ステージ上では主演のインド人俳優やプロデューサーたちがゴールドに輝くオスカー像を手に、代わる代わる受賞コメントを述べている。興奮気味のプロデューサーは、様々なスタッフに感謝を述べたスピーチの最後に客席を指差しながら、こう叫んだ。

「偉大な作品を生み出すきっかけとなった日本人女性ミワ・ルリガキにも、盛大な拍手を！」

次の瞬間、ミワはまぶしい光に包まれた。客席のミワにスポットライトがあてられたのだ。

満場の拍手！

英語がわからないミワは、わけのわからないままに、口を両手で抑えている。すると、耳元に懐かしい声が聞こえた。

「さあ、ミワ、立って、拍手に答えるんだ」

いつの間にか、となりにはナポリタンが座っていて、微笑みながらウイंकをしている。

涙ぐみながら立ち上がったミワに、会場中の観客がスタンディングオベーションを送った。

衛星中継を実家で見ているミワの母親、郡山で見ているハルヨシ、校了終りの眠い目をこすりながら見ているカナコも涙ぐみながら拍手を送っている。ノリコも自宅でシンバルを叩く、サルのおもちゃのように歯をむきだしながら手を叩いていた。

嵐のような拍手が鳴りやんだあとで、ミワはナポリタンに抱きついた。

「ありがとう、あなたのおかげよ」

ナポリタンは眉を上げて答えた。

「おめでとう、きみならできると思っていたよ」

「もう、どこにもいかないで」

ミワの頭をなでならナポリタンはこういった。

「ミワはもう、ひとりでだいじょうぶだ。楽しかったよ」

笑顔でそう言ってナポリタンはまぶしい光になって消えた。

海からの風が気持ちいい。幼いころ、父に連れてきてもらって以来、ハワイは二度目だが、そのころの記憶はない。ミワはこんなに気持ちのいい場所が地球上に存在するなんて想像もしていなかった。

太陽はどこまでも眩しく輝いているのに日本の夏のような湿っぽさがほとんどない。爽やかという言葉がこれほどぴったりくる場所は、他にないだろうと思った。『天国に一番近い島』という映画の舞台は、ニューカレドニアだったがハワイこそ、そうなのではないか、そんな風に考えていた。

「ほんとうに気持ちいいね」

ユウカが水平線の彼方を見つめながら笑顔でいった。ユウカもミワと同じように感じているようだ。

ハワイの言葉で「天国にふさわしい家」という意味の名前を持つホテル。そのオープン・ダイニングにミワは、ユウカといっしょにいた。

目の前にはワイキキビーチ、左手の沖合にはダイヤモンド・ヘッドが見える。一定のリズムを刻む波の音が眠気すら誘うように心地よかった。

ロサンゼルスから日本に帰る途中、ふたりはハワイに立ち寄った。ミワがずっと頭に描いていた光景を現実のものにするためだ。

その瞬間は家族写真を撮った、淡い紫色のランが飾られた白いテーブルクロスのあるオープン・ダイニングで迎えなければならなかった。その場所こそ、ずっとミワが想像していたシーンの舞台だったからだ。

旅行会社の人に聞くと、すぐにその名も「オーキッズ」という名の、このレストランを探し出し、リザーブしてくれたのだ。

「Thank you for waiting. (お待たせいたしました)」

そういいながら襟にブドウのバッチをつけたソムリエが現れた。

ソムリエはクラッシュアイスの入った銀製のクーラーからゴールドのラベルのシャンパンをうやうやしく取り出し、コルクを抜いて、バカラのシャンパングラスに注いだ。グラスはすぐに細かな泡を立てる淡い黄金の液体に満たされた。

ミワがグラスを手に取り、口元で傾けると鼻孔いっぱいには白い花のような香りが広がった。一口ふくむと、その香りはやがて赤いベリーの香りに変化し、最後は上品なチョコレートのような深い余韻となって、いつまでも広がり続けた。こんなに味と香りが変化する飲み物を口にしたのは生まれて初めてのことでミワは目を見開いた。

「すごいね、これ」

正直に驚きを口にすると、ユウカは「ほんとう」といった。なぜだか、おかしくなって二人は目を合わせて笑った。

日本に帰れば互いに多忙な日々が待っている。それは互いに望んだことだった。ただ今は時間がゆっくりと流れていく、この時を心から味わっていたかった。

大手シャンパーニュ・メーカーのなかでも一番高い自社畑比率を誇るルイ・ロデレール。中でもクリスタルは育てたブドウのできが特別に良い年にだけつくられる。

瓶詰め後の熟成期間に最低でも四年は必要とされる、このシャンパンを開けるのを父は楽しみにしていた。そのことを母から聞いて知ったのはつい最近のことだった。

澱とともに長期間熟成されることでブドウの旨みがふんだんに溶け込み、より味わい深くなるというこのシャンパンを、父はミワの誕生とともに購入し、ミワが成人する日に開けていっしょに飲むことを何より楽しみにしていたという。

残念ながら、そのルイ・ロデールは父の法事の際、逗子の叔父に飲まれてしまったのだが。

ミワはゆっくりと目を閉じた。このシャンパンは大好きな人たちと味わうと決めていた。もうひとりの大好きな人と乾杯するためだ。

大きく深呼吸をした。潮風で胸がいっぱいになる。心からリラックスして波の音に耳を澄ませる。すると、まぶたの裏側に彼の姿が浮かび上がってきた。

ナポリタンはちゃっかりシャンパングラスを持っている。

「来てくれると思ったよ。だってこのシャンパン、大好きなんじゃない？」

いたずらっぽく微笑みながらミワがいうと、ナポリタンは照れたような笑みを浮かべて頭をかいたあとで口の前に拳を作り、ひとつ咳をした。

「乾杯だよ」

ミワがゆっくりとグラスを差し出すと、ナポリタンは深くうなずきながら冷たいシャンパングラスを掲げた。

「いつでも来てくれるよね。お父さん」

彼は至福の表情で、一気に、シャンパンを飲み干した。

(END)